

COMPOST

vol.04

2023

Archival Research Center, Kyoto City University of Arts



COMPOST | vol.04 | 2023

資料編

目次

2022年度芸資研の活動について

佐藤知久

005

.

芸術資源研究センター | 研究活動一覧

重点研究プロジェクト

008

センターとしての研究事業

014

.

芸術資源研究センター | 2022年度活動報告

重点研究プロジェクト

015

アーカイブ研究会

054

.

よりあいのまとめ

058

.

芸術資源研究センター | スタッフ一覧

062

003

Contents

2022年度芸資研の活動について

佐藤知久

2022年は、一年を通じて本学が沓掛キャンパスに位置する最後の年となった。植物や季節、授業や学生たちの活動にあわせ、キャンパスの風景は刻一刻と変化する。秋から冬にかけての沓掛は今年が最後である。この冬には記録的な大雪もあり、キャンパスにとじこめられ一夜を過ごした学生や教員数十名にとっては、わずれがたい日となったことだろう。

今年度、芸資研は開設9年目をむかえた。2022年には新たに4つの研究プロジェクトがはじまり、年度末時点で28のプロジェクトが進行中である。それらについては本編と、次ページ以後の活動報告をお読みいただくとして、ここでは主に以下のふたつの活動についてとりあげる。

沓掛1980-2023

2023年の大学移転に向け、京都芸大の沓掛キャンパスで撮影された写真をデジタルアーカイブ化するとりくみである^[1]。卒業生や在学生をはじめ、教職員や近隣の方々など、広く本学に関係する方々に呼びかけ、ウェブ上の投稿フォームを通じて沓掛キャンパスで撮影した写真を提供いただくことで、沓掛時代の本学の記録をつくっている。

1980年に本学が沓掛へ移転したとき、今熊野キャンパスの様子は本学卒業生の写真家・井上隆雄によって撮影され、写真集『描き歌い伝えて』にまとめられた。今回は「ひとりの写真家」による記録ではなく、「多数の記録者の個人的記憶の集合体」として沓掛時代の記録をつくろうとしている。移転前の沓掛キャンパスの日々の風景写真を蓄積した写真群のアーカイブは、逐次ウェブサイト上のデータベースで公開しているので、ぜひ投稿をお願いしたい(<https://kutsukake2023.com/>)。

写真以外にも、沓掛キャンパスの3Dデータの作成や、「沓掛アーカイバル・ナイト」と題したトークイベントを通じたオーラルヒストリーの収集などをおこなっている。沓掛の記録や記憶に関しては、収集をつづけているので、「こんなものがあるのですが」といったご相談があれば、ぜひ芸資研までご連絡いただきたい。

分散型芸術資源アーカイブ

芸資研にとって長年の課題は、本号巻頭言で阿部先生も述べているように、蓄積するデータ群をどう公開し活用するかである。すんなりいかない理由は主に二つあったと言える。

第一に、芸資研には大規模なデータベースを長期間運用するためのさまざまな「リソース」が不足していること。第二に、芸資研が「創造のためのアーカイブ」を、すなわち、さまざまな資料や資源をフラットに並べ、それを個人が「リミックス／誤読」する装置としてのアーカイブをめざしていること、である。

本研究ではこれら課題への解答可能性を、「自律分散型」のアーカイブに求めている。これは、ひとつのアーカイブ機関が中央集権的にあらゆる資料を収集・管理するのではなく、個人や各団体・部局など、複数の主体がそれぞれ保持するデジタルな資料群を、その真正性を保証しつつ、基本的にはそれぞれが管理したままひとつの共有されたアーカイブとして、公開・利用するというものだ^[2]。

具体的には、芸資研の研究プロジェクトを通じて作られた資料群、個々の作家が所有している記録や資料、各芸術系大学がそれぞれ作成したアーカイブなど、個人・プロジェクト・大学などが持つさまざまな資料群を、それぞれが管理しつつ共有する方法を探求している。

こうしたアーカイブはまだ実例が少なく、視察や研究会での議論などをつうじて模索を続けている段階である。本年度は、各種学会や学内外の研究会での発表のほか、総合基礎実技アーカイブのデータベースをモデルとした学内での分散管理の実験を進めている。

ふりかえれば今年の芸資研は（も？）、アーカイブにまつわるさまざまな行為としての「アーカイビング」に複数の人びとが関わり、複数の視点から同じ資料や記録を読みかえすことで活気づいていた。あらためて、複数の個人が同じ「資源」を見て「思い出し、引き上げ、読みかえす」ことの可能性を感じた一年だった。

[1] 本学特別研究助成の支援を受けている（研究課題名：沓掛学舎アーカイブズ）。現在の主なプロジェクトメンバーは、石原友明、砂山太一、埴美智子、藤岡洋、石谷治寛、阪本結、船戸彩子、西原彩香、大崎緑。主な協力者は、湯澤洋、大三敏秀、SAKIYA合同会社、鳥井直輝ほか（敬称略）。

[2] 本研究は、JSPS科研費の助成を受けている（課題番号21H00496）。

主な出来事（敬称略）

- 4月19日…………… 芸資研ネットワークミーティング（以後毎月1回程度開催）
- 5月25日…………… 藤浩志、沓掛キャンパス食堂横の池より、ハニワ引き上げ（ハニワは兵庫県立美術館「関西の80年代」展に出品。芸資研による記録を作成。写真：清水花菜、動画制作：河原雪花）
- 5月26日…………… プロジェクトリーダー会議
- 6月11日…………… アートドキュメンテーション学会シンポジウム（慶應義塾大学）にて、分散型芸術資源アーカイブについて発表（佐藤知久）
- 7月19日…………… 東京藝術大学未来創造継承センターより、平論一郎・田口智子来所
- 8月5日…………… 第36回アーカイブ研究会「西洋美術史研究と芸術資源」（発表：大熊夏実、深谷訓子、倉持充希、西嶋亜美、今井澄子）
- 9月24日…………… 第1回分散型芸術資源アーカイブ研究会（発表：石原友明、佐藤知久）
- 10月21日…………… 第37回アーカイブ研究会「沓掛アーカイバル・ナイト〈第1回〉沓掛時代から平成美術へ」（発表：松尾恵、原久子）
- 11月2日…………… 多摩美術大学アートアーカイヴセンターより、光田由里、古谷博子、大島成己、高橋庸平、米山建壱、山下大輔、本田和葉来所
- 11月4日…………… 第2回分散型芸術資源アーカイブ研究会（発表：砂山太一）
- 11月5～7日…「沓掛1980-2023」、京都市立芸術大学芸大祭2022にブース出展
- 12月9日…………… 第3回分散型芸術資源アーカイブ研究会（発表：埴美智子・石原友明・石谷治寛・砂山太一）
- 12月23日…………… 東京藝術大学未来創造継承センターでのクリエイティブ・アーカイヴ研究会にて、分散型芸術資源アーカイブに関する発表（佐藤知久、藤岡洋）
- 1月19日…………… 黒川岳、COMPOST表紙の版木を沓掛キャンパス各所で叩く
- 2月15～17日…ドローンによる沓掛キャンパス撮影（SAKIYA合同会社）
- 2月24日～3月7日 総合基礎実技アーカイブの再整理作業（協力：井上明彦、黒川岳、平田万葉）
- 3月4日…………… 音と身体の記事プロジェクト研究会「柴田南雄のシアター・ピース考」（発表：竹内直、徳永崇、滝奈々子）
- 3月12日…………… 国立民族学博物館にて、シンポジウム「写真家井上隆雄の視座を継ぐ」（発表：正垣雅子ほか）
- 3月14日…………… 第4回分散型芸術資源アーカイブ研究会（発表：藤岡洋）

芸術資源研究センター 研究活動一覧

重点研究プロジェクト

プロジェクト	プロジェクトリーダー	2014 (H26)	2015 (H27)	2016 (H28)	2017 (H29)	2018 (H30)	2019 (H31)	2020 (R1)	2021 (R2)	2022 (R3)
2014-										
オーラル・ヒストリー										
芸術関係者に聞き取り調査を行い、口述された内容をオーラル・ヒストリー(口述資料)として記録・保存・研究します。本学ゆかりの作家を中心に、「戦後日本美術」「京都画壇」「フルクサス」に焦点を当てた研究活動を展開しています。										
戦後日本美術のオーラルヒストリー	加治屋健司									
京都・近代絵画の記憶	松尾芳樹									
フルクサスのオーラルヒストリー	柿沼敏江									
(2018年度終了)										
記譜プロジェクト										
西洋音楽の記譜法、日本の伝統音楽や民俗芸能を研究し、その解析や再現を進めます。同時に、作品や創作プロセスを含めて記譜法を広く捉え直し、記譜を新たな芸術創造の装置とみなし、表現の多様性を探ります。										
音と身体の記譜研究	竹内直									
(2014-19年度までは柿沼敏江がプロジェクトリーダー)										
感覚のアーキペラゴ	高橋 悟									
伝統音楽の記譜法からの創造	武内美恵子									
(2014-17年度までは藤田隆則がプロジェクトリーダー)										
富本憲吉アーカイブ・辻本勇コレクション	森野彰人									
富本憲吉記念館創設者辻本勇氏からコレクションの寄贈を受け、本学の前身である京都市立美術大学に陶磁器専攻を創設した元学長富本憲吉ゆかりの書簡等の資料を調査研究し、中間成果として書籍「富本憲吉『わが陶器造り』」を2019年に刊行しました。										
総合基礎実技アーカイブ	高瀬菜菜・中井友路									
本学美術学部の新入生全員が各専攻に分かれる前に受講し、分野を横断する柔軟な基礎力の育成を図る授業「総合基礎実技」の課題と成果を資料化し、芸術教育に新たな展望を開くことを目指します。(2021年度から総合基礎研究室の非常勤講師がプロジェクトリーダーを担当。2014-20年度までは井上明彦がプロジェクトリーダー)										
2015-										
うっしから読み取る技術的アーカイブ	彬子女王殿下									
「高細密複写」と違い、「写し」や「模写」はその行為を通じ作品の背景を読み解き、技法、素材を後世へと引き継ぐ大事な役割があります。「写し」「模写」を技術、技法、素材から考察し、そのアーカイブの可能性と汎用性を模索します。(2020年度終了)										
音楽学部演奏会録音資料デジタルアーカイブ (DAT)	山本 毅									
本学には音楽学部創設以来の貴重な演奏記録が保存されていますが、収録当時の記録媒体は寿命が短く、劣化が激しいものがあります。これらのデジタル化を進め、整備活用のために調査を行います。(2021年度終了)										
「奥行き感覚」のアーカイブ	中ハシクシゲ									
絵画や彫刻をはじめとするさまざまな芸術作品に感じられる「奥行き感覚」が研究対象です。この感覚の背後には、視覚にとどまらない共通感覚や、複雑な仕方で読み解いている多様な情報や質が存在します。そうしたものを検討・整理、アーカイブしながら「奥行き感覚」の客観化を目指します。(2020年度終了)										
京都市立芸術大学附属図書館 美術教科書コレクションアーカイブ事業	横田 学									
本学美術教育研究会が長年にわたり収集した、明治時代からの図画工作・美術教科書は図書館に寄贈され、1400冊以上のコレクションを形成しています。美術だけでなく教育や社会の歴史を辿るうえでも非常に重要かつ貴重なこれらの教科書は、経年劣化が著しいため、アーカイブ化し、今後のさまざまな活用に向けての道を拓きます。(2019年度終了)										
Sujin Memory Bank Project	林田 新									
過去を保存し未来へと継承することは、アーカイブに期待される機能の一つです。残されたものの事後の検証・活用し、写真を含む映像が果たす役割や可能性について、実践的な立場で研究に取り組み、ワークショップ等で考察を深めます。(2018年度終了)										

プロジェクト	プロジェクトリーダー	2014 (H26)	2015 (H27)	2016 (H28)	2017 (H29)	2018 (H30)	2019 (H31)	2020 (R1)	2021 (R2)	2022 (R3)
タイムベストメディア作品アーカイブにおける鑑賞性の保存・修復・再創造	砂山太一									→
芸術資源研究センターで構築したダムタイプ作品《pH》のデジタル・アーカイブと仮想現実（VR）シミュレーターの更なる活用方法に関して研究します。シミュレーター内でのパフォーマンスの再現および情報技術を用いたアーカイビングの技法を探索し、VRによる作品鑑賞を介したアーカイブ閲覧の今日的可能性について検証します。										
2020-										
歴史的音源で検証する 20 世紀ピアノ/黄金期の音色	梅岡俊彦									→
歴史的音源と大型蓄音器を使い20世紀前半のピアノ/黄金期の音色の魅力をオリジナルのサウンドで検証します。当時の巨匠達が愛用した欧米のトップピアノメーカーの個性溢れる音色を解説を交えて最高級蓄音器の音で紹介。エラール、プレイエル、ベヒシュタインなど今や殆ど聴く機会が無いピアノの銘器11社の音色の聴き比べを予定しています。										
THEATRE E9 KYOTO 上演作品アーカイブ	あごうさとし									→
2019年6月にオープンしたTHEATRE E9 KYOTOで上演される舞台芸術を記録し、後世に残していくアーカイブを作成します。そのための方法論と仕組みづくりを劇場と共同で行い、3年後には劇場のみで自律的にアーカイブを続けていける環境を整えていくことを目指します。（2020年度は中井悠がプロジェクトリーダー）										
映像配信のアーカイブ実験室	石谷治寛									→
本プロジェクトを映像の撮影・編集・アーカイブ・配信のための実験室として運営します。動画や写真や音楽（将来的には3D点群スキャン画像など）を、ネットワークサーバー上に構築したアーカイブ・データベースで管理することを通して、過去の資源を再活用する方法を確立します。それらを通して、芸資研をスタジオとし、映像配信とそのアーカイブを蓄積するシステムやワークフローを整備し、開かれた実験室とします。										
2021-										
京都芸大国際交流アーカイブ	金田勝一									→
本学の交換留学経験者に対する聞き取り調査を中心に、その経験を文章化・可視化し、比較可能にすることで、芸術大学における交換留学の多様な特性や効果について理解するためのアーカイブ活動を行います。またその活動を通し、留学参加者以外にも、その効果を波及させる手法について研究します。										
Stone Letter Project	田中栄子									→
京都市立芸術大学に約50年間保管されていた日本専売公社で制作されていたタバコのラベル印刷の石版原版約340枚を分類し、明治から「石版印刷」の黄金期に至るまでの石版印刷がどのように展開し、現在のデザインと美術の分野で果たした役割と意義を改めて考察・検証する事を目的としている。それと同時に、京都芸大の教育的資料として記録し、保管・継承する方法を考察する。										
MIMIC	安藤由佳子・岡本秀・熊野陽平									→
MIMICは、現在活動を続けるアーティストが、自分たちの活動する地域で、当事者自ら行う記録・調査を通じて、既存の美術史におけるアーティストの語り方を考えるためのプロジェクトです。調査者となるアーティストが、対象に選んだアーティストの技法やテーマを「模倣（MIMIC）」し、作品を制作する過程や対象との対話を記録します。										
日本文化～記憶から伝承へ～	彬子女王殿下									→
「日本文化を考える」を主題とし、彬子女王殿下の講義を通して日本文化を様々な視点から学生と共に捉え直し、創作活動へと展開します。										
2022-										
発送の現場としてのドローイング・アーカイブ	谷内春子									→
このプロジェクトは、創造活動の手前側（もしくは奥側）として位置づけることができる「ドローイング」について、「イメージ」と「描く」という行為の間にある相互関係のありように焦点を当てその実態を捉えること、またその後の教育や研究において利用可能なアーカイブとしての土台を形成することを目指しています。										
抽象のしくみ—— 観賞・批評・教育に向けてのアプローチ	小島徳朗									→
造形表現のプロセスに関与する抽象能力に着目することで、造形表現ひいては表現全般の普遍的な仕組みについて研究します。この過程で得られる成果を元に新しい評価基盤の構築と鑑賞方法の提案、さらには実技と理論を交えた実用性のある教育資源として取りまとめ、現場への還元を目指します。										
芸術系大学シラバスのアーカイブ	玉澤春史									→
シラバスは大学がどのような学生を理想としているかを記したものであり、大学からの受験生や学生へのステートメントである。京都市立芸術大学のウェブ閲覧可能になる前のシラバス・学事要綱をアーカイブ化し、歴史的変遷を研究することで大学の持つ芸術に対する見方を理解していく。										
芸術資源循環センター	矢津吉隆・山田毅									→
アーティストのアトリエから出る魅力的な廃材を“副産物”と呼び、回収、販売する資材循環プロジェクト。作品の制作過程で副次的に生まれてくる“副産物”は、アトリエの片隅に置かれいずれば捨てられる運命にあったモノたちです。それぞれの作家の感性を帯びた作品未満のそれらのモノたちに取って代わってスポットを当てることで、ものの価値や可能性について改めて考える機会をつくります。										

センターとしての研究事業

2015

タイムベースト・メディアを用いた美術作品の修復／保存に関するモデル事業

(文化庁 平成27(2015)年度 メディア芸術連携促進事業)

せんだいメディアテーク、ダムタイプオフィス、国立国際美術館と連携して実施した事業である。本事業では、タイムベースト・メディア作品の典型として、古橋悌二《LOVERS—永遠の恋人たち—》(1994年)の修復・保存作業を行なった。また、海外機関における先行事例の調査を、ドイツ・カールスルーエ市のカールスルーエ・アート・アンド・メディアセンター(ZKM)、イギリス・ロンドン市のテートにて行なうとともに、国立国際美術館との共催で、シンポジウム「過去の現在の未来アーティスト、学芸員、研究者が考える現代美術の保存と修復」を、また修復された《LOVERS》の公開とワークショップ「メディアアートの生と転生 保存修復とアーカイブの諸問題を中心に」を開催した。

2016

タイムベースト・メディアを用いた美術作品の修復・保存・記録のためのガイド作成

(文化庁 平成28(2016)年度 メディア芸術連携促進事業)

2015年度に行った《LOVERS》の修復と保存事業を実施する過程で得られた、タイムベースト・メディアを用いた作品の保存・修復・記録についての知見を他の美術作品にも応用できる「ガイド」にまとめた事業である。ガイドは「タイムベースト・メディアとは」「ガイドの概要」「修復／保存の歩み」「資料」「用語集」「保管」「展示」「修復」「リーガル・デザイン」「来たるべきネットワーク」から成る。執筆者：石谷治寛、小川絢子、加治屋健司、砂山太一、水野祐、山峰潤也。

以下URLにて公開中。http://www.kcua.ac.jp/arc/time-based-media/

2017-2018

ダムタイプ《pH》のシミュレーター制作と関連資料アーカイブ

(文化庁 平成29(2017)年度+平成30(2018)年度 メディア芸術アーカイブ推進支援事業)

パフォーマンス、インスタレーション、出版などマルチメディアで展開された、ダムタイプの作品《pH》(1990-)のアーカイブ化事業である。「未来において《pH》を再演するとき何が必要か?」という課題を設定し、「再演のためのスコア」としての3Dシミュレーターの作成と、再演に必要な資料のデジタル・アーカイブ化を実施した。2015年から行っているタイムベースト・メディア研究を、生身の身体動作をふくむパフォーマンス作品へ発展させたものである。デジタルなアーカイブの作成に加え、学生や若いアーティストが作業に参加することによる教育的効果や、オリジナル作品の制作スタッフやパフォーマンスと記憶を共有するエコシステムの形成も進められた。

記譜プロジェクト「伝統音楽の記譜法からの創造」

本研究は2019年から引き続き実施しているものである。

主要なテーマは、中国の伝統楽器であり伝統音楽である古琴(琴・七弦琴)の記譜法と伝承の形態についての検討である。

古琴は中国の伝統楽器であるが、日本にも伝来し、平安時代と江戸時代を中心に演奏・継承されてきた。その楽器の特性から、独自の記譜を有してきた歴史があるが、従来の記譜法と近年の演奏方法、特に指遣いに関しては乖離があるのではないかと考えられる。そこで、2019年度から、北京在住で中国の国家級非物質文化遺産古琴芸術代表性传承人である吳釗氏に講演等をしていただいている。

2019年度は本学に招いて吳釗氏に講演していただいた。2020年度も講演を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の流行により、来日が叶わなかったため、2019年度に実施した講演の録画を編集した。

2021年度も新型コロナウイルス感染症により来日できない状況であったため、吳釗氏が2020年に文化芸術出版社より出版された『古楽尋幽—吳釗音楽学文集』(ISBN: 9787503968143)に掲載されている論文「試談古琴減字譜的創制問題」(古琴の減字譜の創造に関する試論)を翻訳した。

2022年度も新型コロナウイルス感染症の状況が改善せず、中国からの渡航が叶わない状況であったため、2021年度に使用した吳釗氏の著書から、別の論文である「传统与现代——中国古琴艺术面临的挑战」(伝統と現代——中国の古琴芸術が直面する挑戦)を翻訳することにした。

当該論文は、「琴の現代化」または「琴の大衆化」と伝統的な琴の間の矛盾と衝突を挙げ、芸術的な表現、美学意識、音楽の形態及び芸術の価値などの角度から分析し、琴の伝承の問題を指摘するものである。

現在、翻訳を遂行中であり、完成し次第、諸手続きを経て、当センターのホームページにアーカイブとして公開する予定である。

(武内恵美子)



『古楽尋幽 吳釗音乐学文集』

記譜プロジェクト「音と身体の記譜研究」

2022年度末、「音と身体の記譜研究」プロジェクトでは「柴田南雄のシアター・ピース考」と題した企画の実施を予定している。

日本の作曲家・柴田南雄(1916-1996)には日本の民俗芸能に取材したシアター・ピースと呼ばれる作品群がある。柴田のシアター・ピースは合唱によって上演されることを意図されているが、一般的な合唱作品とは異なり、多くの作品で不確実性を取り入れた記譜が採用されている。また上演にあたって鍵となるのは、楽譜の表面に書かれた事柄だけでなく、楽譜に書かれていない事柄をどのように読むか(あるいは理解するか)という点である。つまり楽譜の背後にある様々な事柄、とくに取材した民俗芸能のもつ固有の文脈を知らなければ、実際に上演することは難しい。

本企画では、柴田南雄のシアター・ピースを研究し、また自身の作品にも応用している作曲家・徳永崇氏(広島大学大学院准教授)を招き、「柴田南雄のシアター・ピースの上演における諸問題——記譜されていない情報に着目して——」と題した講演をしていただく予定になっている。講演では柴田のシアター・ピース作品のなかでも日本の民俗芸能に取材した《追分節考》(1973)、《念佛踊》(1976)、および古今東西の恋歌を素材とした《歌垣》(1983)を取り上げて、とくに記譜されていない事柄に注目しながら、上演に内在する様々な問題を考えることになるだろう。当日は講演に先立って「柴田南雄の創作活動とシアター・ピース」と題した筆者の概説、講演後は徳永氏と筆者による座談会も行う予定である。

柴田南雄のシアターピースについては、いざ実際作品を上演することを検討しているが、そのためには、やはり段階的な準備が必要となる。本企画はその最初の取り組みという位置づけである。

その他、本研究プロジェクトでは12月にオンラインでの研究会を行い、現在企画中の「記譜法(ノーターション)」に関する冊子(ハンドブック)とその内容に関しての検討を行った。この冊子は、記譜法(ノーターション)の適切な扱いかたを示すガイドとして企画したもので、2023年度ないしは2024年度中の刊行を目指している。また前期中には、本年度中に行った様々な事案について、プロジェクトに関わる非常勤、客員、共同研究員と個別に意見交換を行ったことも記しておく。

報告の最後に、前年度末に行われたワークショップについて簡単に触れておきたい。2022年3月に、本プロジェクトでは「リュート・タブラチュアの記譜法を考える——鳴ると記すのあわい」と題したワークショップを開催した。ルネサンス期のリュート・タブラチュアを読み解くことをテーマにした本企画には、当該時代の音楽に携わっている音楽家、研究者、造詣の深い愛好家、学生などおよそ30名が参加した。参加者からは専門的な知識に裏付けされた質問がなされるなど、ワークショップ中やトークセッション後の質疑応答を含めて、充実したワークショップになったといえよう。ワークショップで扱ったリュート・タブラチュアの記譜法をめぐる問題については、当日の講師を務めた古楽演奏家、声楽家の笠原雅仁氏と本プロジェクト共同研究員の三島郁による本号所収の研究ノートを、また実際のワークショップと本学音楽学部教授・岡田加津子(作曲)を交えてのトークセッションの内容については、非常勤研究員の滝奈々子の報告を、それぞれ参照されたい。

(竹内直)

柴田南雄のシアター・ピース考

イントロダクション、柴田南雄の創作活動とシアター・ピース
講師：竹内直(音楽学、芸術資源研究センター非常勤研究員)

講演「柴田南雄のシアター・ピースの上演における諸問題」
講師：徳永崇(作曲家、広島大学大学院准教授)

座談会
司会：滝奈々子(芸術資源研究センター非常勤研究員)

2023年3月4日 | 土 |
13:00-16:00 | 12:30 開場 |

会場：京都市立芸術大学学生会館ホール
(ご来場は公共の交通機関をご利用ください)

参加料：無料 (事前予約が必要です)
定員：50名 (一般申し込みは下記のQRコードより申し込みください)

企画主催：京都市立芸術大学芸術資源研究センター「音と身体の記譜研究」プロジェクト
共催：東洋音楽学会西日本支部

「音と身体の記譜研究会」チラシ

総合基礎実技アーカイブ

2014年度から始まった美術学部総合基礎実技のアーカイブ化の作業は、今年で9年目となる。2021年度に引き続き常勤教員がつかずに総合基礎研究室の非常勤講師2名が主体となって後期に行くことになり、高瀬葉菜（油画専攻出身）、中井友路（構想設計専攻出身）の2名が担当した。今年度は1990年と2022年のアーカイブ作業を11～12月の期間に1日6時間、出勤日数10日間、各60時間にわたって行った。

昨年度に続き、[年代/課題内容/担当教員/学生]の各項目から検索できるアーカイブを総合基礎研究室内につくり、公開用データベースにスムーズに移行できるようにデータを体系的に整理することを目標にした。また本年度は総合基礎アーカイブに携わっていた井上明彦先生の最後の監修期間になり、次年度にスムーズに引き継げるようマニュアルの完成に取り組んだ。

作業方法の面では、今年度は、昨年度の続きとして1990年度のスライド、ネガフィルム、紙焼き写真、紙資料のスキャンとそれに伴うデータ処理やID表の作成を行った。また同時に、次年度以降のアーカイブ化の作業をスムーズにするため、今年度の未整理の膨大な授業記録をアーカイブ向けに再整理し、記録フォルダの統一的な構造化を進めた。

以下に、次年度以降の作業に向けて、注意すべき点を挙げておきたい。

- ・スライド、ネガフィルムのスキャンには透過原稿用ユニットが必要となり毎度芸資研から借りているが、今後もアーカイブ作業を続けていくなら総合基礎アーカイブ用に購入を検討する必要がある。
- ・また、1990年はビデオテープによる動画記録は発見されなかったが、次年度は専用のメディア機器を用いたビデオテープのデジタル化が課題となる。ビデオテープのデ

ジタル化には、ビデオテープに入っている記録と同じだけ時間がかかるので後期の作業時間では収まらない。そのため前期から少しずつ始める必要がある。

- ・ID表について：1990年の課題は通年なら夏休みである9月も含め課題数が7つあり、年によって課題数が違うため研修旅行や総基礎展記録の課題番号は【0】に改めた。
- ・データ処理について：紙焼き写真や紙資料をスキャンする際は、スキャン後LZW圧縮してからtiffデータに変換することでより軽いファイルで保存した。また、Photoshopの自動処理機能（バッチ）の導入によって一律のサイズに変換する作業が大幅に短縮できた。
- ・アーカイブのバックアップデータが入ったハードディスクが複数あり、管理表が見つかったが使い方に無駄があるので今後整理が必要となる。
- ・オンラインでの作業を円滑にするため、今年度は新しく「総合基礎アーカイブ本部」の名称でドライブとクラスルームを作成。教員間での共有可能な下準備を行った。

今年度のアーカイブ作業で一番問題になったのがAdobe、Officeのサブスクリプションの更新、それに伴うMacのソフトウェアアップデートに時間を取られたことだ。特にAdobeは大学管理のため短期でメンバーが変わる総合基礎非常勤では更新が難しく、OSやソフトウェアのアップデートに関する知見が必要である。また、近年は写真や動画での記録が簡単になり、その結果、膨大な記録をアーカイブすることになるので、来年度は選別作業を行ったうえでアーカイブ手順を踏むことを薦める。

来年度の後期からキャンパスが移転する。移転前に、曖昧になっているデータ整理、機材の確認などアーカイブ作業環境を整えるこ

総合基礎アーカイブ進捗表 (2022/11/27)

	第1段階作業(作業1+作業2) ○:デジタル化処理済み △:処理中 ×:未処理					第2段階作業(作業3+作業4)			
	カリキュラム番号	カリキュラム№1化	作品記録番号	作品記録ファイル名(ネガ/スライド)	記録(動画)	名簿(Excel)	【集】表示用データ化	ID表	備考
1971(昭和46)	○	○	○	○	—	○	○	△	△
1972(昭和47)	○	○	○	○	—	○	○	×	× ファイル名和暦
1973(昭和48)	○	○	○	○	—	○	○	×	× ファイル名和暦
1974(昭和49)	○	○	○	○	—	○	○	×	× ファイル名和暦
1975(昭和50)	○	○	○	○	—	○	○	×	× ファイル名和暦
1976(昭和51)	○	○	○	○	音声テープ ×	○	○	×	× ファイル名和暦
1977(昭和52)	○	○	○	○	音声テープ ×	○	○	×	× ファイル名和暦
1978(昭和53)	○	—	○	○	—	○	○	×	× ファイル名和暦
1979(昭和54)	○	—	○	○	音声テープ ×	○	○	×	× ファイル名和暦
1980(昭和55)	○	—	○	○	音声テープ ×	○	○	×	× ファイル名和暦
1981(昭和56)	○	—	○	○	音声テープ ×	×(名簿番号紛失)	○	×	× ファイル名和暦
1982(昭和57)	○	—	○	○	×	○	○	×	× ファイル名和暦
1983(昭和58)	○	—	○	○	×	×(名簿番号紛失)	○	×	× ファイル名和暦
1984(昭和59)	○	—	△	○	×	○	○	×	× ファイル名和暦
1985(昭和60)	○	—	○	○	×	○	○	×	× ファイル名和暦
1986(昭和61)	○	—	○	○	×	○	○	○	△
1987(昭和62)	○	—	○	○	×	○	○	○	△
1988(昭和63)	○	—	○	○	×	○	○	○	△
1989(平成1)	○	—	○	○	×	○	○	○	○
1990(平成2)	△	—	△	△	×	○	○	△	△
1991(平成3)	×	—	×	×	×	○	○	×	×
1992(平成4)	×	—	×	×	×	○	○	×	×
1993(平成4)	×	—	×	×	×	×	×	×	×
1994(平成4)	×	—	×	×	×	×	×	×	×
1995(平成5)	×	—	×	×	×	×	×	×	×
1996(平成5)	×	—	×	×	×	×	×	×	×
1997(平成6)	×	—	×	×	×	○	○	×	×
1998(平成6)	×	—	×	×	×	○	○	×	×
1999(平成11)	×	—	×	×	×	○	○	×	×
2000(平成12)	×	—	×	×	×	○	○	×	×
2001(平成13)	×	—	×	×	×	○	○	×	×
2002(平成14)	×	—	×	×	×	×	×	×	×
2003(平成15)	×	—	×	×	×	×	×	×	×
2004(平成16)	×	—	×	×	×	×	×	×	×
2005(平成17)	×	—	×	×	×	×	×	×	×
2006(平成18)	×	—	×	×	×	×	×	×	×
2007(平成19)	×	—	×	×	×	×	×	×	×
2008(平成20)	×	—	×	×	×	×	×	×	×
2009(平成21)	×	—	×	×	×	×	×	×	×
2010(平成22)	×	—	×	×	×	×	×	×	×
2011(平成23)	△	—	△	△	×	△	△	×	×
2012(平成24)	△	—	△	△	×	△	△	×	×
2013(平成25)	△	—	△	△	×	△	△	×	×
2014(平成26)	×	—	×	×	×	△	△	×	×
2015(平成27)	×	—	×	×	×	×	×	×	×
2016(平成28)	×	—	×	×	×	×	×	×	×
2017(平成29)	×	—	×	×	×	×	×	×	×
2018(平成30)	×	—	×	×	×	×	×	×	×
2019(令和1)	×	—	×	×	×	×	×	×	×
2020(令和2)	×	—	×	×	×	×	×	×	×
2021(令和3)	△	—	△	△	×	△	△	×	×
2022(令和4)	△	—	△	△	×	△	△	×	×

総合基礎アーカイブ進捗表

とが大切である。今後とも更新を途絶えさせずに外部からのアクセスが可能になるよう発展していくことを期待する。

(中井友路・高瀬葉菜)

美術関連資料のアーカイブ構築と活用

井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究

「井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究」(通称：井上隆雄写真資料アーカイブ研究)では、昨年度に引き続いて、京都市立芸術大学特別研究助成を受け「井上隆雄撮影の仏教壁画のアーカイブ実践による仏教美術研究ネットワークの構築」という課題で研究を遂行している。昨年度に報告した通り、井上隆雄写真のうち、インド・ラダックおよびビルマ(現ミャンマー)・バガンのポジフィルムに対して、DiPLAS^[1]から整理分類、デジタル化、データベース化の支援を受けている。この支援は、2017~2020年度までの芸術研究重点プロジェクトで実施したアーカイブ実践の成果を基盤に、原資料保存と利活用の利便性の向上を目的としている。写真資料は、井上隆雄のアトリエから旧崇仁小へ、さらに旧淳風小へと移動を繰り返している。荷造りしたままの密封ケース、紙箱に収納されたビルマ関連の写真資料に対するDiPLASの支援内容は、①ポジフィルムの現状記録、②ポジフィルムの番号付け、③マウントや袋に井上隆雄が記載していたメモ等の文字起こし、④上記の情報を集約したエクセルリストの作成、⑤ポジフィルムのデジタル化、⑥コンタクトシートの作成、⑦ポジフィルムの整理収納、である。これによって、原資料の保存形態、およびデジタル画像データやエクセルリスト等の管理環境が格段に改善された。引き続き、デジタルデータベースの検索システム登録をDiPLASの後継プロジェクトX-DiPLAS^[2]の支援を受けて進行中である。最終的には、ラダック撮影画像1707枚、ビルマ撮影画像4679枚を登録する予定で、このデータベースの運用、公開については今後、関係者と検討していく予定である。一連の作業は、国立民族学博物館(以下、民博)の末森薫氏、丸

川雄三氏、石山俊氏、島貫直子氏のご尽力による。事細かに相談、連絡、確認をいただき、これまでのアーカイブ作業の状況把握とともに、より良い資料保存の形を目指したデータベース作成を進めることができた。関係者の方々に心よりの感謝を申し上げる。

「仏教美術研究ネットワークの構築」という研究課題に対しては、これまで3回の研究会を実施した。デジタル化した壁画写真の表現内容を菊谷竜太氏(インド密教学・高野山大学)、寺井淳一氏(バガン研究・東京外国語大学)、翟建群氏(画家・本学日本画専攻)らと検証した際に、壁画の色についての関心が寄せられた。ポジフィルムの劣化傾向に対応したデジタル画像の色調補正が可能かどうか。途方もない作業量の予感はあるが、民博の情報課の奥村泰之氏、カメラマンの増田大輔氏のご教示を得て、井上隆雄写真資料アーカイブ研究の研究員 岡田真輝氏が色調補正の試行を続けている。2021-22年にポジフィルムをデジタル化した複製画像で色調補正を試行した結果、いくつかの傾向と対策を見出した。井上隆雄写真アーカイブ研究メンバーの色へのこだわりは、DiPLASに採用された案件の中では特異的なことと認知されたようである。X-DiPLASに引き継がれた井上隆雄写真資料は、色調補正、データベースに掲載する情報入力作業などを次年度以降に進めていく。

また、末森薫氏、寺井淳一氏、翟建群氏、筆者はラダックの仏教寺院壁画調査を計画した。国際間の移動が徐々に再開されていたが、インド政府が中国籍者に対してビザ発給を停止していたため、翟建群氏の渡航は諦めざるを得なかった。ワクチン接種証明の運用、出入国ルールが頻繁に変更されることに加えて、インド考古局(ASI)のオンライン申請システムの不具合で、事前許可を得ること



井上隆雄写真資料 DiPLASによる整理後の様子
香掛音高の総合芸術専攻部屋 2022年12月
撮影：正垣雅子



森村泰昌関連資料
モリムラ@ミュージアム倉庫 2022年12月
撮影：大村邦男

ができない等、諸々の気がある渡航となった。現地では大学発行の身分証明と推薦書での取材交渉という運びとなったが、現地協力者Skarma Gurmet氏(JULAY LADAKH代表)の尽力で、多くの仏教壁画の取材を実施することができた。調査最終日にはNational Museum InstituteにおいてDr. Anupa Pande(Department of History of Art)が主催するInternational workshop “Buddhist Mural Painting of Asia:Interface with India”で我々3名が各専門領域と今回の調査について講演を行った。その様子は現地新聞DAINIK JAGARANに取り上げられた(2022年9月29日掲載記事)。

一連の活動については、2023年3月12日に民博で開催するシンポジウム「写真家 井上隆雄の視座を継ぐ—仏教壁画デジタルライブラリと芸術実践—」で報告する予定である。

デジタル化作業と並行して「写真家・井上隆雄」の人物像を知るために、本学卒業生のひろいぶこ氏(本学名誉教授)、吉本忍氏(民博名誉教授)にインタビューを実施した。井上隆雄と京都芸大探検部創立のつながり、民族学の研究者との協働、民博との関係が浮き彫りになってきた。この点については、準備を整え、次年度に深めていきたい。

(正垣雅子)

森村泰昌アーカイブ

京都市立芸術大学の2023年夏の移転を控え、2009年より預かって整理してきた森村泰昌関連文獻資料(2000年まで)を一旦、モリムラ@ミュージアムへ移動する作業を行った。データベースは引き続き公開活用し、また随時追加訂正も行ってゆく予定である。また、現在は各資料に仮の番号札をはさんでいる状態で、これも将来的活用を考えると、ラベルを貼るなどして閲覧用とし、資料コーナーに置くことも検討されている。本文獻資料は該当だけでなく、雑誌書籍等がそのまま収集されているため、1980年代後半以降の日本の現代美術の動向や受容を考える上でも貴重な資料群であり、2000年以降の資料群についても、同様に追加整理を行って更なる活用が目指される。

(加須屋明子)

[1] 新学術領域研究(研究領域提案型)『学術研究支援基盤形成』研究基盤リソース支援プログラム「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」(JP 16H06281)による「地域研究画像デジタルライブラリ(DiPLAS)」が2016年度から2021年度まで実施された。

[2] 人間文化研究機構の共創先導プロジェクト(共創促進研究)である「学術知デジタルライブラリの構築」の一環として、国立民族学博物館が拠点となって2022年度から進めている。

京都美術の歴史学—京都芸大の1950年代

本研究では戦後の占領期・復興期の京都における本学彫刻専攻及びデザイン専攻の教育について調査を行っている。2022年3月14日、芸術資源研究センターにて研究会を実施し、菊川と牧田久美が研究発表を行った。各研究室の教育改革には1950年の大学昇格という制度的な問題にも関わるものであり、出席者から他専攻の事例についても新たな知見を得ることができた。この意見交換をふまえて本年は個別に研究を進めている。

菊川は堀内正和及び辻晉堂について、ご遺族及び画廊が所蔵する一次資料調査を再開し研究を進めている。今年度は研究内容について全国の研究者、学芸員、作家と意見交換する機会に恵まれ、「生誕100年 清水九兵衛／六兵衛」展（千葉市美術館、京都国立近代美術館）、「AGAIN-ST ルーツ／ツール 彫刻の虚材と教材」展（武蔵野美術大学美術館・図書館）のトークイベントに登壇し、前者は『視る』（522号、京都国立近代美術館）に、後者は同展図録に論考を寄せた。また彫刻家・陶芸家の宮永理吉氏への聞き取り調査を日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴから一般公開し、50～70年代にかけての教育の様子、学生たちの姿について具体的に明らかにした。以上のことから本学の教育及び京都の戦後彫刻の特質を、東京藝術大学を中心に築かれてきた美術大学の彫刻教育と相対化し、関係者と問題意識を共有できたことは収穫であった。

牧田は上野リチの本校におけるデザイン教育の詳細を明らかにするため、彼女の在職中（1951～63年）の卒業生約340人のうち返信可能な約100名に、その教育の概要と具体的な内容についてのアンケート調査を3月に実施した。6割を超える回答者から、リチのウィーン工房由来の非常に独自でインパクトのある教育姿勢が詳細に語られ、また想定を

超えるリチ研究への支持と賛同を得た。現在、多くの卒業生の協力の元に、より具体的な詳細について個別聞き取り調査を継続し、リチの理念がいかに彼らのデザイン活動や社会貢献に活かされたかを調査している。

また各氏の卒業後の活躍を追い、戦後急増した企業におけるデザイン関係の仕事の実情について、戦後デザインの本格的始動という歴史的文脈から調査を進めている。リチが教育者として携ったのは産業が急成長する時代で、新しい業種や商品が次々と開発され、旧来の図案的思考からデザインの思考への転換が急務とされていた。デザイン教育の必要が叫ばれるこの時期に、リチの先駆的教育が多く優秀な人材を輩出し、業界を牽引した事実が調査で具体的に明らかになりつつある。これらを現在収集しているリチ在職中の実習作品や授業活動関連の写真資料の整理分析や資料収集と関連づけ、リチのデザイン教育の構想と具体的な実情についての本格的なアーカイブの構築を進めている。

一方、デザイン関係の需要の急増で美術大学に受験生が殺到し、これらに対して上野夫妻は入学生の増員を学校側に要求し、企業側の男性中心の求人に対して女性にも門戸解放するよう提案するなど積極的に関わった。また海外留学の便宜もはかった。このようなグローバルかつジェンダーフリーな姿勢にも注目している。

冒頭で述べたような教育改革の背景である大学をとりまく状況の変化にも留意しつつ、プロジェクトの着地点を見据え研究を進めていきたい。

（菊川亜騎）



1952年当時のリチのクラスでの色紙による作品
（1954年度工芸科圖案専攻卒業梨木祐宣氏提供）



1958年度工芸科圖案専攻卒業写真
（1958年度卒業魚谷忠志氏資料提供）



1963年リチ最後となる一時帰郷の出航を見送る船内のスケッチ（1965年工芸科デザイン専攻卒業越田英喜氏提供。船外でも学生や卒業生など大勢が見送ったという）

タイムベースメディア作品アーカイブにおける 鑑賞性の保存・修復・再創造

タイムベースメディアとしての大学
—「沓掛1980-2023」について—

筆者は芸術資源研究センターの重点プロジェクトとして、鑑賞において時間的な変化を有するタイムベースメディア作品の保存修復に従事している。ここ数年、ダムタイプのパフォーマンス作品《pH》をはじめ、京芸に関連するタイムベースメディア作品のアーカイブプロジェクトに携わってきた。時間軸をともなつて一過的におこなわれることの多いタイムベースメディア作品は、ただ単純に再生装置を技術的に保存するだけでなく、その体験や経験自体をいかに現前するものとして表象することができるかという非物質的な側面を本質としていると筆者は考えている。

そこで、本年度はこの経験の表象に関する問題意識を、芸術作品自体から、芸術作品が生まれる場所の経験に拡大し、京都市立芸術大学の2022年度特別研究助成「沓掛学舎アーカイブズ」の一貫として投稿型の写真アーカイブサイト「沓掛1980-2023」の開発研究を行った。

「沓掛1980-2023」は、学内外の誰もが沓掛キャンパスの写真を投稿しデジタルアーカイブとして一覧表示できるwebサイトである。1980年から学生や教員が撮影してきた写真の蓄積を「本学に関係する個々人の記憶の集合体」としてまとめ、web上で閲覧可能にすることを目的としている。

webサイトの可用性としてはモックアップレベルではあるが、限られた予算と人的リソースの中で運用可能なシステムを検討し実装した。開発は2023年1月現在おおかた終了し、試験運用としてワークショップを開催し1000枚程度の写真がすでに投稿されている。

1980年代のものも数枚投稿されており、赤松学長が学生だった画像もあり非常にエモーショナルな感覚を覚える。

ところで、筆者は洛西ニュータウンで生まれた。京都市立芸術大学が今熊野から洛西ニュータウンの北端に移転してきたのは1980年だが、その年は筆者の生まれた年でもある。

1970年代より京都市が進めた大規模住宅計画によって、竹林で覆われる西山丘陵に突如あらわれた街。洛西ニュータウンには様々な思い出があるが、新興住宅地特有の空虚さというか、もつと歴史と文化が蓄積された場所に生まれたかったという単純なコンプレックスも抱えている。まだ子供だった筆者にとっての京芸は、家から一番近い大学である一方、普段自分が生活をしている住宅地域から少し外れた場所で、なにか得体の知れないことをしている人たちがいる謎めいた場所だった。

なにもなかった土地に突如現れた大学。筆者がいくつかの都市や国を経由して、舞い戻るように沓掛キャンパスに赴任した2014年、学生たちとの対談の中で「京芸はガラパゴスと呼ばれている」と知った。良くも悪くも外部との交流をあまりもたず独自の文化的生態系を築きあげてきたことを示すその言葉は、ある種の自嘲であるとともに、まっさらな土地で独自の芸術観を築き上げてきた沓掛文化の誇りのようにも解釈できた。京芸はすでに多くの人が知っているように、2023年に京都駅の本横に移転し、郊外型の大学から都市型の大学に変化する。郊外型の大学で生まれた奇妙だけど固有な芸術の試みは、都市型の大学になることで忘れられるのだろうか。「沓掛1980-2023」が、日本で最も古い芸術



kutsukake2023.com

系大学という伝統を抱えつつも、何もない場所で試行錯誤しながら芸術における革新性と新たなアイデンティティを獲得しようとしてきた沓掛キャンパスの特異な経験に、確かな

手触りと現在性を与えるようなメディアになることを願っている。

(砂山太一)

原版と銅版画作品のアーカイブ

本年度は美術家・今村源氏との作品制作、美術家・林泰彦氏（パラモデル）との試作制作、及び美術家・竹村京氏との打ち合わせなどを行いました。今村氏との研究ではキノコの体験記録を収集し、それを銅版画の技法を伴って作品として氏が形にしていくという方向でした。前年度に2回生銅版画基礎を選択した学生の協力を得て制作した銅版画作品がおよそ30点以上あり、その作品を元に、これから制作をどのように進めていくかを検討していくことから本年度は始まりました。

検討していく中で、氏の考えている制作の方向性と集まった銅版画作品には大きな齟齬があることがわかってきました。集まった銅版画作品は世界の一部を切り取っただけの小さな部分のようであるのに対して、氏が求めているのはその銅版画が出来上がるまでにこぼれ落ちてしまったきっかけや出会い、状況や色や匂い、季節や場所などの情報が重要であるということでした。集まっていた銅版画を使って、美術作品として仕上げることも可能でしたが、話し合う過程でそういったまとめ方は避けようという結論になり、再度、銅版画を集めるための条件や制作方法、人選を含めて一から練り直すことになりました。

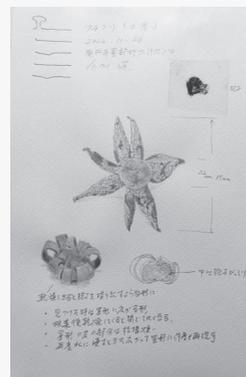
再び条件を整える上で重要視したことは、そもそもキノコに出会うということは自然現象に左右され、キノコ自体が神出鬼没であり、出会い自体が一瞬で、いつでも見れるようなものではないことで、それらを収集するにしてもある程度キノコのことを知っている、もしくは熱意のある人でないと難しいのではないかと。もう一つは、それらを元に銅版画として表現する際に、銅版画の技法自体がある程度経験が必要なものほとんどで、また制作する際に機材の整った工房が必要であり、キノコに熱意がある人のなかで興味と技術の両立している人を探すことが難し

い点（銅版画とキノコの図柄自体は相性が良いと思われる）。

最初の問題点に関しては、氏の旧知の間柄でもある作家（美術家・キノコ研究家など）に協力してもらうこと、菌類研究会の活動に氏とともに参加した学生にも協力してもらうこととしました。また、銅版画技法に関しては、技法の中で最も直感的なドライポイントという技法を選択することにしています。ドライポイントは、鉄筆で直接銅の板に線を刻む技法であり、最古の技法であるエングレーヴィングの修正用として開発されました。初心者でも扱いやすく、鉄筆さえあれば誰でも簡単に線を引くことができ、また抑揚のある、作家の個性を反映させやすい技法です。反面、刷りに関しては自由度も高く、安定して複数枚制作することができるエッチングなどの技法と比べて、一定の技術を必要とします。またエディションも多く取れないことが特徴です。それらネガティブな部分は私と参加メンバーである銅版画経験者が下支えして刷りを行うことにしました。

諸々の条件を整え、氏が特別に用意したドローイング用の紙と銅版画セットをまとめ、参加者に配布し、各々でキノコ観察からスケッチをすることになりました。作品の完成はまた先延ばしになりましたが、スケッチの様子から期待することも多く、情報を共有しながら2023年のキノコシーズンを迎えることとなります。氏の求める循環の中に銅版画が位置付けられて作品化されることは、通俗的な銅版画の表現とは異なる可能性を含んでいると考えています。

パラモデル・林泰彦氏との制作は常套的な版画制作のアイデアとは全く別のきっかけから始まりました。アイデアの元になった平面作品があり、その作品は丸いシール(5mmから30mm程度)をばら撒き、偶然できた形を



集まったキノコの記録

重ねて作品が作られていました。その作品を元に、いくつか銅版に落とし込むためのトライアルを制作する予定にしています。実際にそのシールを防食材料として使用し、腐食技法にて定着する方法と、写真製版を使用して腐食する2パターンを現在検討しています。平面作品として一点ものの制作を考えるのではなく、ポジフィルムや版自体を交換可能なものとして考えることで偶然がまた偶然を生むような制作を検討している段階です。

これらの研究を通して、常套的な銅版画制作の方法や理念とは違う部分を強く感じる事ができました。例えば下絵があり、銅版画技法を使用して制作していく方向も否定され

ることはありませんが、本学版画研究室で試みられている、イメージと物質の関係を他メディアと繋げるような研究や、見えている表面は物質と物質の間であるという中間領域としての版画研究など、連続と続いている意識もありましたが、作品を唯一のものとして考えず、様々な繋がりの中の一つの位置として捉えることが可能であり、循環の中に位置付けることで新たな版画の可能性を開くこともできるのではないかと意識させられました。版画概念の拡大が叫ばれて半世紀になりますが、ようやくその概念の先を示唆するような研究が現れ始めた、作家の制作を下支えしながら静かに確信しています。

(大西伸明)

絵具に問う

美術研究科保存修復専攻では絵画の調査が日常的に行われており、画面の細部に関する画像や自然科学的な手法によるデータを多く得ている。これらのデータは絵画の保存や研究をする上で価値のある資料と考えられるが、これらを専攻でアーカイブする体制が整っていない状況があった。そこで、絵画からより多くを学ぶ環境を整えることを目的とし、保存修復専攻の研究活動によって得られた絵具に関するデータのアーカイブを目指して2019年度より活動してきた。

2019年度および2020年度を通して、芸術資料館収蔵作品および専攻の授業である修復実習における修理作品を対象として行われる調査について、専攻が調査の実施を把握し、データを収集する仕組みの構築を行った。また、専攻を修了した紀芝蓮客員研究員が2019年度までに実施した調査で得たデータをアーカイブするための作業も進めてきた。紀研究員の調査は、近代日本画に使用された絵具の化学組成を明らかにすることを目的として実施され、芸術資料館に収蔵されている明治30年代から40年代にかけての京都市美術工芸学校および京都市立美術京芸学校の絵画科卒業作品を主要な対象としたものである。

近代日本画では、近代になって新たに使用されるようになった絵具があることが知られているが、これまで調査事例が少なく、その詳細は十分に明らかになっていない。アーカイブされた88点のデータは、絵具の種類や使用方法といった点から、近代日本画の分析への活用が期待される。

また、2020年度から2021年度にかけて、芸術資料館に収蔵されている中国絵画8点について、白色顔料の同定を目的に行った調査データについてもアーカイブを行った。これらのアーカイブされたデータには、画面の拡

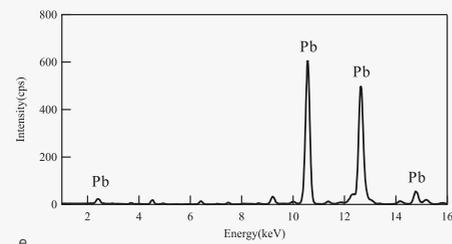
大写真、赤外線写真、紫外線照射写真、顕微鏡写真、蛍光X線スペクトルが含まれる。蛍光X線スペクトルとは、蛍光X線分光分析によって得られるデータで、分析対象の含有元素の情報が得られるため、絵具の同定に利用できるデータである。アーカイブにあたり、写真の撮影条件および撮影箇所、蛍光X線分光分析の測定条件および測定箇所の記録とデータに齟齬がないか確認する作業を川下理恵氏の協力で行っている。

2022年度は、2014年度より修復実習で修理を行っている芦浦観音寺（滋賀県草津市）が所蔵する19幅の歴代住職の肖像画に関するデータを中心にアーカイブの作業を進めた。また、アーカイブしたデータを活用して、専攻の学生が顔の描法の分析を進めている。このほか、データをアーカイブする体制が整いつつあるのと共に、専攻の学生によるデータ利用の需要が出てきているため、データの活用の体制についても検討を行った。これまで、学生からデータ利用の要望があったときには、教務補助員が利用したい学生にその都度データを提供していたが、一部のデータについてはクラウドで専攻内に共有することを試行し、利便性の向上を図った。また、データの保全についても、より安全性の高いデバイスで保管するように改善した。今後は、より効率的な運用となるように改善を図りながら、データの活用を高めたい。

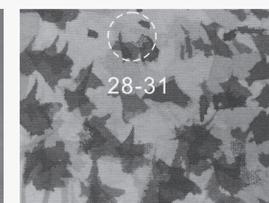
（高林弘実）



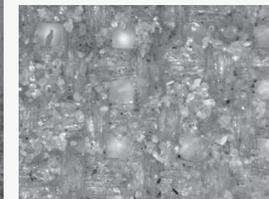
a



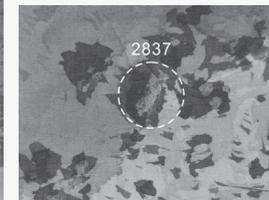
e



b



c



d

アーカイブしたデータの例：高倉観崖《夕陽》より

- 調査箇所の記録（全図）
- 顕微鏡観察をした箇所
- 顕微鏡写真（28）
- 蛍光X線分光分析の測定箇所
- 蛍光X線スペクトル（2837）
これらのデータより、作品には緑鉛鉱による黄緑色の岩絵具が使用されていると推定された。

美術工芸のリソースに関するアーカイブズの試行

2022年度もコロナ禍の関係もあり、大人数での集会を断念し、小規模な会合やリモートなどを用いながら今後に向けての活動を考えることにした。

活動の一つとしては京都文化遺産の維持継承に関する基本的なアクション・プランである「京都市文化財保存活用地域計画」委員会に外部委員として参画し、計画推進の指導に関わっている。ここでは京都文化遺産の維持継承にあたって①「見つける」、②「守る」、③「活かす」の3項目に集約して進めている。

「見つける」については、「旧家等が保管する民俗資料や古文書、近代以降の産業遺産等、社会状況の変化により急速に失われる可能性があるものについては、早急な調査方法の検討を行い、所在の把握と保存の取組に繋げていく必要がある」ことから具体的な対応策を講じることとしている。この点については予算化に向けての提言をおこなっている。大学、博物館、企業等との情報共有と共同による調査・研究の推進によって京都の良さを活かすことができると考えており、行政や大学、博物館、企業等の関係主体が、京都文化遺産に関する情報を共有するためのネットワークを構築するとともに、最新の知見や技術を活かして、共同して京都文化遺産の調査・研究を進める仕組みをつくっていく必要がある。また、出土遺物・古文書等の整理、リスト化、公開を推進することにより広く活用されるものとする。過年度に収集した五条坂の浅見五郎助家の資料整理を進めるとともに、活用する方法を模索している。

「守る」については京都文化遺産の保管施設の確保に向けた検討を進めている。京都市の美術工芸品、歴史資料、埋蔵文化財、民俗資料等の保管場所や恒温、恒湿の環境には課題が多く、それを良好な状態で次世代に託することができる環境整備を行う必要がある。そ

れと共に、民間が所有する指定文化財の買い上げや京都文化遺産の災害時の受入先（収蔵施設）の確保に向けた手法の検討を行っている。

「活かす」については、行政の施策に関わりつつ、具体的なアーカイブズの方法を試みている。「京都やきものラウンドテーブル」と題して、京都市文化財保護課と奈良文化財研究所と連携して京都をめぐる陶磁器のアーカイブズを行った。そこでは京都をめぐる陶磁史を紐解くためのヒアリングや研究集会、展覧会及びデータの公開を企図した。京都市所蔵の京都指定文化財である「三条せと物や町界限出土の「桃山茶陶」」の高精細データを3Dスキャナーでとり、公開することを今年度から3カ年をかけて実施するものである。3Dデータをそのまま公開するだけでなく、茶人や料理人、現代芸術家、日本の古典的な器を用いることのない人々など多様な人が注目したところにタグをつけていく。この「視線のアーカイブ」を加えて公開することにより、広く共有されることを期待するものである。

今年度は福井県陶芸館と連携して9月3日から10月2日まで「いにしへの陶工とあそぶ 桃山デザイン」展を開催した。本学のテーマ演習（考古学）の成果を取り入れつつ公開の手法について実践的に検討した。来年度には4月8日から6月4日まで京都文化博物館にて巡回する予定である。加えて、1990年頃に京都の市街地から桃山陶器が大量に出土したことを契機に、出土品が美術および工芸関係者と関わっていった過程について当時を知る方々へのインタビューを行った。

また、五条坂に所在する藤平窯の保全と活用について基礎的なデータを取るとともに、行政と関わりながら積極的な活用を模索し、資料・作品の保全や活用について行政や地元住民らと話し合いを進めている。

（畑中英二）



桃山デザイン展（福井県陶芸館）



藤平窯

バシェの音響彫刻プロジェクト

1. バシェ・セミナー開始（6月9日、本学大合奏室）

音楽学部の学生から、バシェの音響彫刻を用いて創造活動をしたいという声が上がリ、学内で「バシェ・セミナー」を開始した。初回は10人ほどが集まり、バシェの音響彫刻についてのレクチャーと、パレット・ソノールの試奏を行なった。9月までの間に計5回セミナーを行い、その成果を9月18日の北山フェスティバルにおいて披露することができた（後述）。



バシェ・セミナー開始

2. 大阪府民講座での講演（6月25日、大阪府立中央図書館）

『EXPO'70大阪万博の記憶とアート』という大阪府民向け連続講座のうち、第2回目「1970年の大阪万博とバシェの音響彫刻」を担当した。万博閉幕後40年経ってバシェの音響彫刻が修復・復元されたことを大阪府民に知ってもらい良い機会になったと思う。

3. 「クリエイティブ・アート・スクール」におけるWS（8月6日、千代田アーツ3331）

パレット・ソノールを解体して東京へ運搬し、当日会場で受講者と一緒に組み立てるところからワークショップを開始した。視覚障害のある方や知的障害のある方の参加もあ

り、さまざまな形のパフォーマンスを試みられたことは、私自身にとっても貴重な経験であった。



クリエイティブ・アート・スクールにおけるWS

4. 「東京藝大アーツ・プロジェクト実習」におけるWS（8月8日、東京藝大取手キャンパス）

東京藝大生、幼児～小学生、中学生以上（一般成人も含む）の3部門に分けてワークショップを行なった。年齢層の違い、興味関心の違いなど様々な様相を持つ人たちを無心にさせ、遊び心をくすぐり、その音響空間の中に身を浸す心地好さを、パレット・ソノールを通して共有できたことは、バシェ研究において大変意義深いことであった。



東京藝大取手キャンパス子ども対象WS

5. 高校生の音響彫刻研究（8月28日、本学大学会館ホワイエ+岡田研究室）

京都市立西京高校の2年生3名が、バシェの音響彫刻を見るために本学にやってきた。自由研究の対象として、芸術のジャンルを跨いだ作品について調べているうちにバシェの音響彫刻に行き当たったという。早速彼らには、大学会館ホワイエで実際に音響彫刻に触れ、音を体験してもらった。年度末に論文として研究成果をまとめるそうだが、どのような論文が仕上がるのかが楽しみである。

6. 京都子どもの音楽教室におけるWSと鑑賞クラス（9月10日、京都子どもの音楽教室）

同教室の教員対象のワークショップを今年度やっとなることができた。鑑賞クラスにおいても、子どもたちに自分で触ってもらって実際に音を鳴らす時間を、できるだけ多く設けた。今後、リトミック教育などの中でもパレット・ソノールを用いた音楽を創作し、京都から新しい音楽表現を発信して行ってほしい。

7. 「北山フェスティバル」での公演（9月18日、京都コンサートホールエントランス）

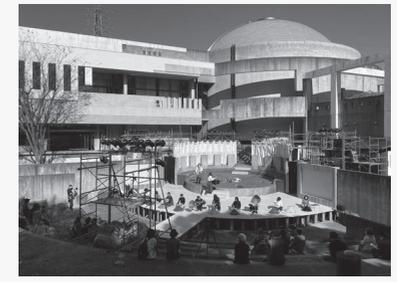
京都市の北山通界隈で開催されたアートプロジェクト「北山フェスティバル2022」（主催/北山モザイク実行委員会）において、「バシェの音」展と題して、展示と演奏を行なった。バシェ・セミナー（前述）のメンバーを中心にパフォーマンス作品を創作し初演した。今後も一層こうした創造活動に取り組んでいきたい。



北山フェスティバル2022での「おとなりさま」初演

8. 芸大祭でのデモンストレーション（11月7日、本学野外ステージ）

春掛最後の芸大祭では、打楽器専攻生9名とバシェ・セミナーから3名、計12名が野外ステージでパレット・ソノールの演奏デモンストレーションを行なった。普段、屋内で演奏することの多いパレット・ソノールだが、視覚的には野外円形ステージに映え、活動の紹介としても効果があったと思う。



野外ステージにおけるデモンストレーション

9. フランス・バシェ協会メンバー来訪（12月7日、大学会館ホワイエ）

フランス人音響技師マリル・キュフィニさんがバシェの音響彫刻を見るために京都芸大を来訪。桂フォーンと渡辺フォーンは日本にしかない芸術遺産である。フランスから遠く離れた異国の地に残されたバシェの音響彫刻を、なんとしても護っていかねば！という思いを強くした。



桂フォーンを試奏するマリル・キュフィニさん

（岡田加津子）

歴史的音源で検証する20世紀ピアノ黄金期の音色

歴史的音源で検証するピアノ黄金期の音色
「ピアノ黄金期の2大ピアノ産地「ドイツ」「フランス」の音色聴き比べ」
2022年10月26日
講師：梅岡俊彦、松原聡
会場：大学会館ホール

現在コンサートやCD録音で聴く事が出来るピアノはスタインウェイやヤマハなど数社のメーカーの独占状態と言えるが、20世紀初頭は世界中の多くのピアノメーカーが質の高い楽器で競い合っており、聴衆も個性の違う音色を日常的に聴き比べてピアノ音楽の多様性を存分に楽しんでいた時代であった。またピアニストも、自分の好みの音色の楽器を選ぶ事によって演奏の独自性をアピールする事が出来た。今から約百年前の「ピアノ黄金期」と言うべきこの時代、世界中のピアノ産地の国の中で2大勢力として圧倒的な人気を得ていたのがドイツとフランスであった。今回はこの2つの国のピアノの魅力や20世紀初頭当時のSPレコードとアコースティック蓄音器での演奏で検証してみる事にした。ピアノ黄金期の音色の違いを検証するため、今回も約1世紀前に発売されたSPレコードと1930年製の英国製大型蓄音器を使って様々なピアノメーカーの歴史的音源を再生してみたが、複製CDでは味わえない生々しい音で両国のピアノの音色を聴き比べる事が出来た。今回は比較のため、演奏はピアノ作品の代表といえるショパンを中心にフランス作品に限定し、ドイツとフランスのピアノ録音を交互に再生してその個性の違いを確かめる事にした。

比較したピアノメーカーと演奏家を紹介する。

■ドイツ

ハンブルク・スタインウェイ

演奏：ラウル・フォン・コチャルスキ

曲名：ショパン《華麗なる円舞曲》

ベヒシュタイン

演奏：エミール・フォン・ザウアー

曲名：ショパン《ワルツ変イ長調》

ブリュートナー

演奏：モーリッツ・ローゼンタール

曲名：ショパン《ワルツ ホ短調》

グロトリアン＝シュタインヴェーク

演奏：ワルター・ギーゼキング

曲名：ドビュッシー《アラベスク第1番》

■フランス

エラーール

演奏：フランシス・ブランテ

曲名：ショパン《エチュード嬰ハ短調》

演奏：アンリ・ジル＝マルシェックス

曲名：ラモー《メヌエット第10番》

ブレイエル

演奏：ロベール・カサドシュ

曲名：ショパン《バラード 第1番》

事前には「力強く明瞭な音色」が特徴のドイツ製、「華やかで肉感的な音色」のフランス製という先入観があったものの、実際の演奏を聴くと両者共それぞれの個性は存分に発揮しながらどのメーカーも見劣りする点は殆ど無く、総合力では互角に渡り合っていた様である。残念ながらフランスのメーカーは2つの世界大戦のダメージで経営が行き詰まり20世紀半ばには姿を消してしまい、ドイツのメーカーも戦災の影響が少なかったスタインウェイのみが健在だったものの、他のメーカーは復興するのにかなりの時間を要した様で、20世紀後半の世界のピアノメーカーの勢力図は大きく様変わりしてしまったと言える。

本イベントの後半は、今や殆ど聴く事が出来ないフランス製ピアノが一時期日本で活躍していた事例を紹介させて頂いた。



原智恵子 日比谷公会堂リサイタル 1949.12.28 エラーールピアノ使用
©昭和音楽大学 撮影：小原敬司



大学会館ホールでの本イベントの様子

最初に、戦前日本で発売されていた音楽月刊誌に掲載されたピアノ販売広告を何点も見せて頂いたが、早くからドイツとフランスのピアノを積極的に輸入していた様子が伺い知れた。

次に、日本に輸入された代表的なフランスピアノとして赤坂迎賓館にある1906年製の豪華なエラーールを取り上げた。今でも迎賓館での公演で使用されている豪華な装飾のピアノが、1949年に世界的なピアニスト原智恵子によって日比谷公会堂で弾かれたということ、最近発見された珍しい舞台写真で確認する事が出来た。また神戸オリエンタルホテルにあった1927年製、新潟三条東高校にあった1930年製のエラーールの由来や現状も紹介する事が出来た。

また大正時代に、母国の近代ピアノ作品

を初めて日本で披露したフランスのピアニスト、アンリ・ジル＝マルシェックスが、まだ珍しかったフランスのピアノを積極的に演奏した事実も貴重な写真と共に披露できた。最後に、関西に現存するドイツやフランスの歴史的ピアノの存在を何件か公開する事も出来た。

今回はピアノ黄金期のドイツとフランスのピアノの魅力の紹介と共に、日本でのフランスピアノの活躍振りを検証する事が出来た。

多くのピアノメーカーが競合していた黄金期の王者であったドイツとフランスのピアノの音色を歴史的音源で知る事で、ピアノ演奏における様々な可能性を若い世代のピアニストに再考してもらえれば幸いである。

(梅岡俊彦)

THEATRE E9 KYOTO 上演作品アーカイブ

本稿では、THEATRE E9 KYOTO (以下、E9) と京都市立芸術大学芸術資源研究センター (以下、研究センター) の協働事業・研究として取り組まれている「THEATER E9 KYOTO 上演作品アーカイブ」プロジェクトについて記す。

主なアーカイブ作業の一つに、舞台作品の記録動画の撮影がある。これまで、20年度は京都市立芸術大学の学生に、21年度は、学生の他、広く一般にメンバーを募って実施した。1台の固定カメラによる撮影というシンプルな内容ではあるが、以下の問題が生じた。

1. 映像撮影の専門家ではないので、画面の傾き、機材の熱暴走など、動画の質やそもそも取れなかった事例のあること
2. 動画を撮影するだけでは、モチベーションが続かないこと
3. 撮影日の設定の困難

1については、想定される問題ではあるのですが予め劇団側には了承の上進めていたため決定的な問題ではない。2は、21年度の取り組みにおいて、モチベーションの問題及び積極的なアーカイブ研究という前向きな課題を前提に、アーカイブ資料を用いた作品の紹介やアーカイブ研究の可能性を探るアートイベントを企画した。だが、アーカイブ資料の取り扱い方について、資料提供者であるアーティストの一人から疑義と中止の要請が来た。アーティストとの対話の結果、当該イベントは中止となる。本件については、アーカイブされた情報の取り扱いについて、及び、その実施とマネージメントには更なるエフォートと環境を整える一定の資金が必要であることも課題として浮き彫りになった。3は、観客の動員が上演直前に判明するため、劇団側も

日時設定の意思決定が直前になる傾向があり、人員の配置に支障が生じる。

上記課題の解決に向け、本年度は、固定カメラによる撮影について、劇場の照明ボタン等につり下げ、常設とすることで簡易な撮影方法が可能であるかを検証した。

この検証に当たっては、京都芸大を卒業し、E9の技術スタッフで劇作家・演出家でもある駒優梨香氏が中心になり、村上花織氏がマネージメントを担当。横田宇雄氏、中谷利明氏、加藤文崇氏らベテラン・中堅の映像家3氏にも加わっていただき、プロジェクトチームを5月に結成した。7月にシステム図を作成。7月のE9アートカレッジ公演で試験的な撮影を行い、8月の劇団三毛猫座のゲネプロで本撮影を行った。

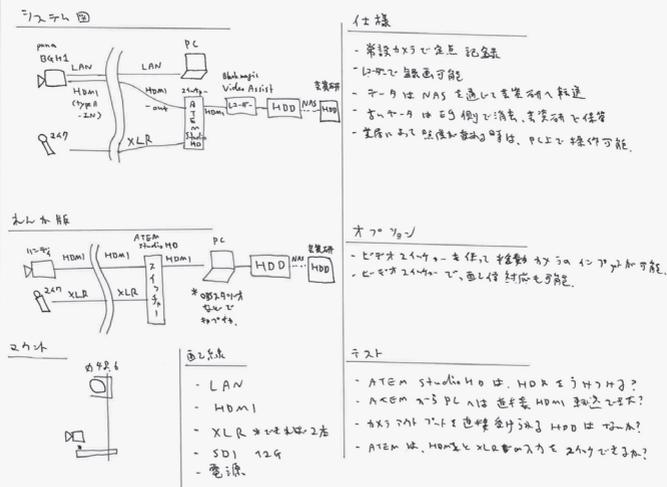
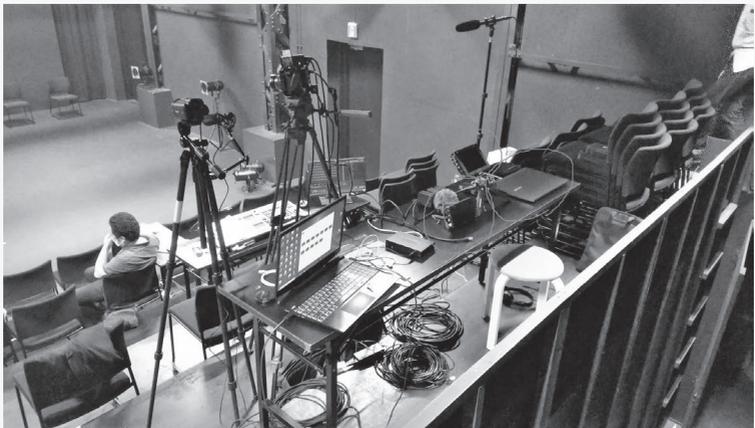
システムの概要は、客席側の照明ボタンにカメラとマイクを設置。劇場事務所でも撮影オペレーションができるように遠隔操作を行う。使用機材は、

- カメラ：BGH1
- レンズ：LUMIX G X VARIO 12-35mm/F2.8
- レコーダー：Blackmagic Video Assist
- マイク：MXL CR21
- 音声レコーダー：DR-701D

とし、ISO2500固定、F7.2で撮影した。

試験結果として、照度の低いシーンも綺麗に収録でき良い結果が得られた。また、遠隔操作も可能である。

課題としては以下がある。E9の技術管理スタッフからは、「カメラが常設となると、照明やその他の機材との取り合いとなり、センターボタンでの設置は困難」「変形舞台の場合、カメラ位置の変更が必要」という意見があった。また導入費用として少なくとも50万円以上は経費がかかる。撮影のオペレーションが簡素化されているとはいえ、変化する状況に対応する人材の設置が求められる。



半数以上の上演団体は自ら記録撮影を用意している状況もあり、その映像などの資料提供でアーカイブは一定程度維持されている。常設カメラの設置については、上記課題とそ

の需要と活用法の検討が必要である。駒氏はじめ関係各位に改めて謝意を述べらる。

(あごうさとし)

映像配信のアーカイブ実験室

本プロジェクトはオンライン配信を通じたアーカイブの利活用や共有のための新しい方法を実験することを目的としている。2020年度のコロナ禍においてオンラインでのライブ配信等の需要が高まり、その可能性を探索するために本プロジェクトは構想された。あわせて、沓掛キャンパスで撮影された写真を収集し、オンライン上で公開する取り組みも進めている。

2022年度は、沓掛キャンパスの日常の雰囲気や伝えられるよう、学内の出来事を記録したドキュメンタリー映像の制作と配信に取り組んだ。題材となる出来事には、食堂前の池に沈むハニワの引き上げ作業(2022年5月25日)を選んだが、このハニワは卒業生で美術家の藤浩志氏が1985年の大学院修了制作の一環として制作したもので、大学の一部のように歴代の学生たちに親しまれてきたとされている。藤氏が80年代当時の自作として「関西の80年代」展(兵庫県立美術館、2022年6月18日～8月21日)に出展するためハニワを池から引き上げるといふ情報が入り、学内で調査をしたところハニワがもう一体沈んでいることがわかった。もうひとつのハニワは学生たちが2015年の「総合基礎実技」の授業課題で藤氏のハニワをリサーチして制作したもので、二体のハニワの結婚式が挙げられて池の中に沈められたという。学内でなかば伝説化していたこの二体のハニワをめぐるエピソード自体を、沓掛キャンパスで綿々と受け継がれてきた制作実践を象徴するものとして、それらの引き上げ作業のドキュメントを制作することとした。

映像は、ふたつめのハニワを制作したメンバーの一人でもある卒業生で映像作家の河原雪花氏と協働し、Ufer! ART DOCUMENTARYの岸本康氏をアドバイザーに迎えて制作している。池の周辺に多くの人が集まって見守

り、作業を手伝う様子まで収められるよう複数のカメラで多視点的に撮影した。また、池の中に入って作業する臨場感を伝えるため、実際の引き上げ作業をする藤氏と黒川岳氏(本学非常勤講師)には防水のアクションカメラを着用してもらった。それらの複数カメラで撮影した映像をモニタージュシ、約6分の短い映像にまとめて芸術資源研究センターのYouTubeチャンネルにて公開した(<https://www.youtube.com/watch?v=jtlwC18lXrA> 2023年1月11日時点での再生回数は1008回)。

映像配信URLの広報についても、大学関係者や藤氏とネットワークのある方に加えていただけるように周知方法に工夫を加えている。ハニワ作品の出展された兵庫県立美術館や、学内の複数箇所ですポストカード型の広報用フライヤーを配布し、カードにあるQRコードをスマートフォンで読み込んでもらうことで配信サイトへの誘導に繋げた。多くの方のSNS等で紹介してもらい、また岸本氏からオンライン上で閲覧してもらいやすくするためのアドバイスをいただいた成果もあって、広く知っていただけたと考える。今後も映像等のオンライン配信の取り組みを様々な形で試みることで、アーカイブの共有方法の選択肢を広げていきたい。

(埜 美智子)

上:「YouTube」動画配信サイトの画面
(動画制作:河原雪花、写真:清水花菜)
中:藤浩志氏(右)・黒川岳氏(左)・引き上げられた二体のハニワの記念写真*
下左:広報用フライヤー表面*
下右:広報用フライヤー裏面*
*写真:清水花菜



京都芸大国際交流アーカイブ

2年目を迎えた「京都芸大国際交流アーカイブ」では、昨年度より開始した「交換留学から迎えるキャリアパス」の2度目の開催、そして新たな企画として「受入交換留学生に対する統括インタビュー」を行った。

「交換留学から迎えるキャリアパス」

本研究プロジェクトと、教務学生課学生・国際担当、キャリアデザインセンターが共同で開催し、派遣交換留学を経験した本学の美術・音楽修士を招き、現在の活動における留学経験をお話いただく座談会形式の研究会である。交換留学の成果を可視化するほか、本学学生に対して、国際的に活躍するアーティストや音楽家に、国際的な学び・活動に関して、直接話を聞く機会を提供することも目的とし、学内に広く参加を呼びかけている。

本年度は、本学大学院修士課程であるアーティストの湊茉莉氏と、フルーティストの永野伶美氏を招き、それぞれの現在のキャリアと交換留学との関係を振り返りながら伺った。

両名はそれぞれの派遣交換留学先である、パリ国立高等美術学校（湊）とプレーメン芸術大学（永野）に、本学大学院修士課程後に再び正規生として留学し、学位を得た経験を持っている。事前に交換留学時の経験に関するインタビューを行ったあと、ウェブサイト上で公開した上で、本研究会中は再渡航した後のことや、現在の芸術活動に関するお話を主に伺った。交換留学をきっかけとして、さらに海外での学びを深め、現在の活動へと繋げていった両名の経験は、交換留学の位置付けを捉えるモデルケースとして貴重なものであり、本研究プロジェクトにとっても重要な証言を記録する機会となった。

「受入交換留学生に対する統括インタビュー」

新型コロナウイルス感染症の影響により、

留学生の入国が規制され、本学では約2年間交換留学生の受入を行うことができていなかった。2022年春に同規制が緩和され、今年度前期より交換留学生の受入を再開することとなった。美術学部・大学院美術研究科では、従来は後期のみで開催されていた「留学生展」を前期にも開催し、前期に来日する交換留学生の成果発表の機会が創設された。それに合わせ、この期間中に受入交換留学生全員が集まってもらい、お互いの経験を話し合いながら、それぞれにとっての交換留学の位置付けや、その経験の価値について振り返るインタビューを行った。前期に来日した英国王立美術大学（以下RCA）、ミラノ工科大学、パリ国立高等美術学校からの留学生計4名にとっては、長い渡航制限を乗り越え、渡航の延期を繰り返した末にたどり着いた経験だったこともあり、短期間ではあるが強い連帯感を持って留学期間を過ごしたことが振りかえられ、パンデミックという、時代の空気感を強く伴ったインタビューを収録することとなった。後期に来日したRCA、フランス国立高等装飾美術学校からの留学生計4名にも同様に聞き取りを行った。

このほかに、昨年度の留学生展の付随イベントとして、海外出身の学生や教員に依頼し、各国について写真でプレゼンを行った交流企画「Koko-Doko／焚き火パーティー」の記録映像を公開予定である。

今後は、アーカイブ活動の方向性と企画の定着を目指し、長期的に同様の聞き取り調査を行う体制や手法を確立させることに集中し、本学における国際交流の記録とその価値を長いスパンで可視化していく活動へと展開する。

（橋爪皓佐）



「Koko-Doko／焚き火パーティー」の様子

撮影：清水花菜

Stone Letter Project

「Stone Letter Project #5—圧縮と解凍」展 報告

本研究プロジェクトは、京都芸大の倉庫より発見された明治以降に印刷産業で使用されていた石版と発見された石版をめぐる情報を記録し、後世に残していくアーカイブを作成することを目的としています。

1970年頃、日本専売公社京都印刷工場から京都市立芸術大学（以下、京都芸大）に、タバコのパッケージなどの印刷に使用されていた大量の石版石が移管されました。教育の場での再利用を目的として移管されたこれらの石版石は、西洋画科、デザイン科、彫刻科に分配されました。当時の西洋画科の版画制作教室（版画専攻の前身）では多くの学生が石版を手がけていましたが、金属版の普及もあり、版画以外の専攻では使用する学生は多くはなく、多くの石版は移管された状態のまま、今熊野校舎を経て1980年のキャンパス移転後の沓掛校舎の倉庫に約40年間保管されたままになっていました。これら340枚の石版石の調査をきっかけにスタートした本プロジェクトの研究報告として、展覧会「Stone Letter Project #5—圧縮と解凍」を11月19日～12月11日までギャラリー@KCUAで開催することができました。

展覧会では、プロジェクトで使用している全ての「石版石」と、当時と同じ方法で画像を新たに紙に刷って記録した「印刷物」、研磨された石版に投影された「映像」の3つのメディアをインストールしました。

石版石は倉庫で積み上げられたまま保管されていた状態を再現し、「層=レイヤー」としての石版の分厚い断面を提示しました。個人が情報を簡単に入手し、手軽にプリンターで

複製出力できる今の時代に、物質的な質量を伴う石版印刷にあらためて実際に触れる機会となり、写真や画像などを記録し生成させる支持体としての「メディア」が、現在でも依然として「物質」であることを再認識する機会になりました。

また、石版に残されている分版された画像を、当時と同じ方法で紙に刷って記録した印刷物などを壁一面に展示し、積み上げられた分厚い石版から紙に写し取られたイメージの軽やかさとの対比を提示しました。そもそも石は、物質が時間をかけて圧縮されることで生まれます。重い石版を倉庫から一枚一枚運び出し、版面上の硬化したインクを洗い落とし、石版プレス機を使用して紙に印刷する作業は、パソコン上での圧縮された大容量のデータの解凍作業に似ています。同時に沓掛校舎の片隅の倉庫に積み上げられ、物質的な厚みと時間の層が圧縮された石版を解凍するように明らかにしてゆくことで、京都芸大の沓掛時代の歴史の断面を違う視点で記録することにもなると考えています。

映像作家の林勇氣さんに依頼し、石版石に施されていた有名なタバコのパッケージ「ピース」のイメージを実際に金盤と金剛砂を使用して研磨して消去する映像を制作していただきました。その映像を、研磨して表面に何も描かれていない石版石をモニターとして、マッピング投影しました。石版印刷では、石版石の表面を研磨すれば何度でも新しい版として使用できます。保管されていた石版石は明治から昭和初期まで実際に使用されていたもので、約130年の時を経て明治以来の記憶を留めています。同時に、石版石の表面に残されているのは、最後に描画・印刷された画像の痕跡です。それを研磨して画像を消去することで、新たな表面が再生し、新しいイメージを描くことのできる未来を石版でつなぐこと



展示風景



チラシデザイン (UMMM北原和規)

ができます。同時に、これらの石版は、印刷産業の歴史の中に何層にも重なったイメージの集積と消去の歴史を語りかける、先人からの手紙でもあるのです。

私たちの周りには印刷物が溢れています。そしてその印刷物のほとんどは、オフセット印刷で刷られています。

今日の印刷産業で主流のオフセット印刷や版画で使用される金属版は1回限りでその役目を終えますが、オフセット印刷の源流でも

ある石版印刷では、石版石の表面を研磨すれば何度でも新しい版として使用できます。

「Stone Letter Project #5—圧縮と解凍」展では、当時の印刷産業を牽引した石版の記録や記憶媒体としての強度と性能を実感するとともに、プロジェクトを通して私たちが経験した、過去と現在と未来を往還する体験を多くの人と共有することができたのではないかと思います。

(田中栄子)

MIMIC

MIMICのプロジェクト2年目は、昨年度に実施した石井海音のリサーチ記録集の制作・刊行と、新たなリサーチ企画を並行して進めた。

まず、本プロジェクトを簡潔に概要しておく。

MIMICでは、リサーチ対象者の制作スタイルや作品を模倣し、実際に制作することで調査を実施する。

(本プロジェクトでは、この模倣制作と記録プロセスをMIMICと呼ぶ。)

石井のリサーチでは、MIMICメンバーである岡本が石井作品を模倣したが、新たな企画ではゲスト調査者を招待し、それぞれ企画を進めてきた。

ただし、クニモチのリサーチは諸事情により進行が困難となったため、本稿では村上のリサーチについて主に報告する。

また、石井海音の記録集は、本文は昨年 completed しており、表紙の制作など正式な配布に向けた準備が主。表紙は、石井の絵画作品の関心のひとつである「線とイメージの関係性」から抜け、MIMICロゴをあしらった紙に、石井のドローイングをシルクスクリーンで手刷りした。

さて、村上美樹によるリサーチは、村上が開催している「ソックモンキー」または「新しい道具」という縫い物の制作ワークショップを軸に進行中である。

村上は、1994年秋田県生まれ、本学大学院修士課程彫刻専攻を修了している。現在は京都を拠点に活動する。立体造形やインスタレーション、旅、エッセイ、縫い物など、自然体で美術に関わる村上に制作を行ってもらうことで、村上の作家性や作品をよく知ることが企図する。

とりわけ今回は、不特定多数または任意の参加者とのワークショップを複数回開催し、

その記録を行う。

本年度に行ったワークショップは2回で、内容は以下。

①「ソックモンキーをつくる」ワークショップ^[1]

5月28日(土)、29日(日)(場所: MtK Contemporary Art 2階)

内容: あらかじめ募集した複数の参加者と一緒に、ソックモンキーの「耳」や「腕」「尻尾」「口」を、好きな位置に付けることで、自分だけのかたちを見つけるワークショップ。

②「新しい道具をつくる」ワークショップ

8月22日(月)(場所: 京都市立芸術大学 彫刻棟 合同研究室)

内容: 本学美術学科彫刻専攻教授の中原浩大先生と一緒に、村上のぬいぐるみ作品「新しい道具」の制作を行う。

今後は、参加者を変えながらもう何度かワークショップを行い、インタビューをとる予定である。

(岡本 秀)

[1] 『ソックモンキーを作る』募集ページ(<https://workshop001mtk.jimdofree.com/>、最終アクセス: 2022.11.30)



「石井海音のMIMIC」記録集表紙の制作風景



村上美樹の縫い物作品「新しい道具」をつくる中原先生

抽象のしくみ 観賞・批評・教育に向けてのアプローチ

本プロジェクトでは、いわゆる抽象表現に限らず、「表現」と呼ぶあらゆる創造行為の根底で働いている人間の精神作用としての「抽象化」、「抽象作用」に着目し、この根源的な活動を手掛かりに、表現にまつわるさまざまな事象を考察することによって、新たな鑑賞、批評、そして教育に繋げていくことを目指している。

当研究は本年度より芸術資源研究センターの重点研究プロジェクトとして参加することになったが、それ以前の2020年度後期から本学のテーマ演習の枠組みを使用し既に開始されている。

これまで授業という性質上、セメスターごとに「デフォルメ」(20年度後期)、「文字」(21年度前期)、「オノマトペ」(21年度後期)という検討課題を設定し、各課題に係る「抽象のしくみ」について参加者と議論を重ねながら検証のための切り口を導き出し、その切り口を検討するための実技課題を考案・実施することで、包含される抽象作用を経験的に理解することに努めてきた。

今年度は検討課題を通期で「装飾」と設定し、装飾造形に内包される抽象作用について検討した。

前期には「装飾」を俯瞰的に捉えることから始め、【モチーフから装飾へ、およびその意味】、【既存の模様・パターン】、【機能性(装飾か否か)】という3つの切り口を設定した。その後、参加者各自が興味のある切り口に分かれて班を作り、班ごとに並行して話し合いを重ね、それぞれの切り口から装飾に係る抽象作用を浮き彫りにするための実技課題を考案し、参加者全員でそれを実施、そこで作り出された成果物を元にさらに検討を行った。結果的には、平面表現における装飾の問題を中心に扱うことになった。

後期には前期の結果を受け、今度は立体表

現における装飾の問題と、さらには装飾概念が成立する以前の「装飾」についての検討を行った。手始めに国立民族学博物館に見学に行き、さまざまな装飾の実見を通して【形から考える(装飾概念ができる以前の「装飾」に用いられる形に焦点を当て検討する)】、【物語から考える(装飾概念ができる以前の「装飾」が持つ意味性・物語性に焦点を当て検討する)】というふたつの切り口から考察することになった。その後、瓜生山学園京都芸術大学芸術館の収蔵する縄文土器を熟覧する機会を得、また同館より教材用として登録されている縄文土器の実物を2点借り受けることができ、実際の模刻を通して、装飾が「装飾」と呼ばれる以前の造形を体験的に考察する機会を作ることができた(前後期授業の詳細は今年度本学美術学部研究紀要に掲載)。

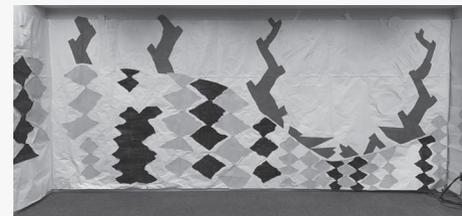
ここまでの研究は、あくまで授業内の限られた時間で行われてきたものであるが、本学のさまざまな専攻に所属する学生と異なる専門領域の研究者が共同で検討課題に向き合うことにより、広範な視点を生み出し、抽象に係る本質的な問題を浮き彫りにしながら、それを抽出可能にする独自の実技課題を作り出し、その成果物を蓄積することができている。しかし残念ながら、時間の都合上、これらの蓄積された成果を振り返り、さらにブラッシュアップしてまとめることがこれまで十分にできていない。

今回この重点プロジェクトに参加することをきっかけとして、今年度の終わりまでには、現時点までに蓄積された成果を振り返り、整理する手法を確立し、これまでの期間で築き上げてきた研究サイクルの中に組み込むことを目指したいと考えている。

(小島徳朗)



1.



2.



3.



4.

1.2.3. 平面表現における「装飾」の検討
4. 立体表現における「装飾」の検討

発想の現場としてのドローイング・アーカイブ

プロジェクト概要

ドローイングは紙などの記録媒体に手を動かした痕跡を残すことで、イメージへアプローチする最も原初的な手段といえる。私自身、描き手としてドローイングを行う中で、描くこととイメージ（ここでいうイメージとは私たちを取り巻く多種多様な「像」のことであり、色や形をもった事物や心象風景から感情まで多岐に渡るもの）の間には相互関係があるということを経験してきた。

ここで仮にこの相互関係を「a(描く)⇔b(イメージ)」という簡単な記号で表してみたい。

aからbへ伸びる矢印は「描く行為がイメージを目指すこと」、bからaへ伸びる矢印は「描かれたものが別のイメージを連想させ次の描く行為を誘引すること」という関係が繋がっていることを指している。つまり、ドローイングにおいては、ある像を創造する側面と、ある像へ導く側面が入り替わり立ち替わりながら現れ、どちらが先かということは一義的には言い当てられない。そしてその関係性は、意識下であったり無意識下であったり、その時により様々である。また人によっては、aからの矢印とbからの矢印のどちらか片方の力が強い場合もあるかもしれない。いずれにしても、描くこととイメージの関係は一方通行ではなく、多かれ少なかれ行き来しながら手を動かしているということになる。

このプロジェクトでは、このような発想の現場としてのドローイングを、「a⇔b」の関係性を読み解くことのできる芸術資源とみなしアーカイブを進めていこうとしている。つまり、ドローイングの役割について、「イメージ」と「描く」という行為の間にある相互関係のありように焦点を当て、様々なサンプルから実態を捉えることを目的に、またそれが後

の教育や研究において利用可能なアーカイブとして、ドローイング行為の収集を目指すというものだ。

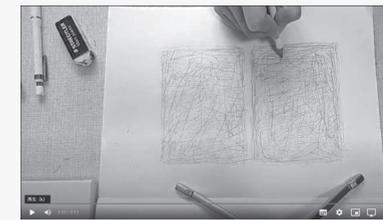
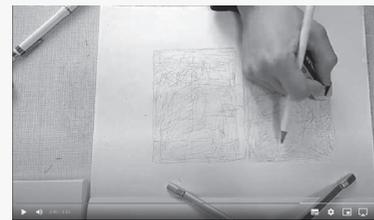
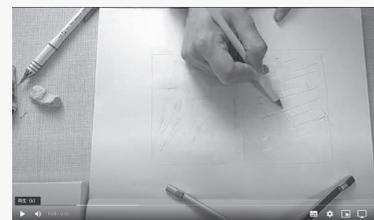
以上の観点から、アーカイブ対象となるものとして留意したいのは、芸術性の高いドローイングだけを対象とすることよりも、むしろ途中段階の記録や落書きのようなそれ自体に何かしらの価値判断を下すことさえ難しいものも含んでいる点にある。そのためドローイングの途中段階の画像、作画している様子を収めた動画や、ドローイングに対する制作者のコメント等についてもアーカイブすることを視野に、現物ではなくデジタルアーカイブが基本となると考えた。

今年度の取り組み

基本的には三カ年計画で、この多岐にわたるドローイングの収集を効果的に行なっていくため、今年度は準備期間として設定した。ドローイングの収集対象は、どのようなものが想定されるのか、またどのような方法で収集しうるのかを検証するため、プロジェクトメンバー内で自らのドローイング画像を実験台として想定を行ってきた。また、ドローイング描画の動画撮影を試みることで、どのような条件であれば作画行為の中にあるイメージと描くことの関係性を写し出すことができるのか検証を進めている。

一方、画像の収集方法の検討として、当初は操作の簡便さからTwitterでの作業を試したが課題も多く、現段階では本研究用のGoogleアカウントを作成し、その中で画像を抱えることにして、画像の関連性に基づくファイリングを行うこととした。今後Googleフォームの活用を視野に、今年度中には、ドローイング収集のためのプラットフォームを完成させる予定である。

(谷内春子)



プロジェクトメンバーによるドローイング動画から抜粋

芸術資源循環センター

芸術資源循環センターは、SDGs時代の芸術大学における、「不用品とされるもの」(資材・物品など)とそれらにまつわる記憶や技術について、循環経済(サーキュラー・エコノミー)の観点から共有・再活用することの意義とその方法について研究しています。循環経済は来るべき経済活動のあり方として注目されていますが、本研究はそれを芸術領域において実装する可能性について探求するものです。

具体的には、2023年の移転を予定している京都市立芸術大学において、排出される不用品や資材を「沓掛キャンパスの芸術資源」としてとらえ、それらに関連する記憶や技術とともに循環させるネットワークを「芸術資源循環センター」という名の活動として構築することを通じて、新キャンパスを「資源循環型の芸術大学」として稼働させるためのプロトタイプを設計・運用し、その将来的な実現可能性について検討しています。

2022年の活動として、京都市立芸術大学が保有する資源の管理や運用、廃棄の仕組みを調査しました。またそれらを大学事務局や京都市とともに活用する方法を、学生研究員も交え、複数の試みで行ってきました。

プロジェクトリーダーである副産物産店^[1](矢津吉隆、山田毅)は、小山田徹氏(本学彫刻専攻教授、本プロジェクトメンバー)の保有する小屋を再活用し、場としての芸術資源循環センターを制作しました。教員や学生からの相談も何件か受け、資材の提供なども行いました。また京都市と共に「アートサーキュレーション2023」と題して、京都市が保有する資源の活用に向けて模索もおこなってきました。今後、2023年のキャンパス移転に向け、大学全体として廃棄物が大量に排出されるタイミングを前に、循環の仕組みを構築していく予定です。

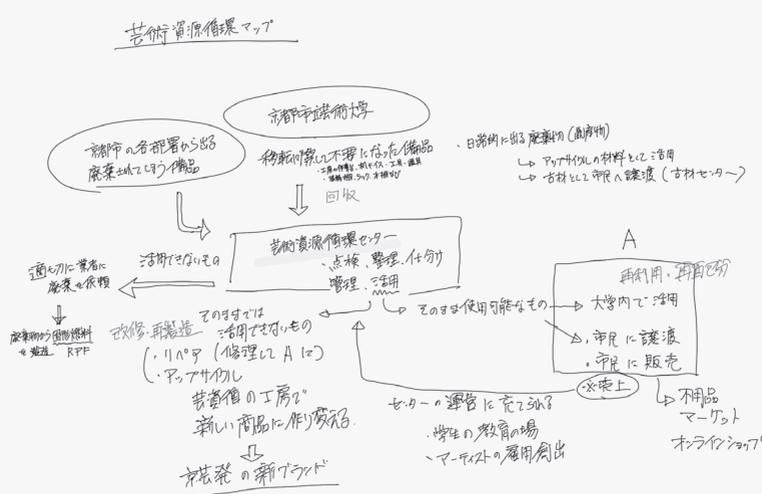
学生研究員・神林優美(本学構想設計専攻M2)は、音楽領域における芸術資源の保存と活用についても見直し、それらの新しい活用や循環の方法を考えながら、これからの芸術のあり方を研究しています。本年は使用されていない楽器や廃棄される楽器の活用を目標に、楽器の回収を始めました。神林は自身の活動として、2021年4月に結成した「副産物楽団ゾンビーズ」では、壊れてしまった楽器や使われなくなった楽器の音を鳴らし蘇らせる活動を行っています。まだ音は生きています。ただ音は生きてはいるけれど、アンデッドな状態の楽器を“ゾンビ楽器”と捉え、それらの楽器がかつて鳴らしていた音や楽器の周りを取り巻く人々の風景を再び呼び起こしたいと考えています。大学移転後、空っぽになった沓掛キャンパス音楽棟を大きなゾンビ楽器として捉え、建物自体の音を鳴らすことをゾンビーズで密かに計画しています。

学生研究員・鳥井直輝(本学プロダクトデザイン専攻2回生)は「そうきそ循環センター」の実施と「資源循環アプリ」の提案を行いました。「そうきそ循環センター」では、本学一回生総合基礎実技の授業内の制作にて、学内の芸術資源を循環させるシステムを提案し、活用してもらうことで芸術資源の可能性を検証しました。

- 「そうきそ循環センター」の稼働内容は、
- ①各専攻から芸術資源を大会館横の拠点に集める、または専攻内に芸術資源のフリースペースを設置する
 - ②集まった芸術資源を掲示板・SNSにて共有し、循環を促進させる

この2つを実践していく中で、学内の芸術資源がよく出る拠点マップと資源一覧を制作した。またこのデータから「資源循環アプリ」のモックアップのデザインに取り組みました。

(山田 毅・神林優美・鳥井直輝)



芸術資源循環センター／ロードマップ

[1] アーティストのアトリエから出る魅力的な廃材を“副産物”と呼び、回収、販売する資材循環プロジェクト。作品の制作過程で副次的に生まれてくる“副産物”は、アトリエの片隅に置かれいずれば捨てられる運命にあったモノたちです。それぞれの作家の感性を帯びた作品未満のそれらのモノたちに敢えてスポットを当てることで、ものの価値や可能性について改めて考える機会をつくりたいと思っています。主な展覧会はやんばるアートフェスティバル2019-2020(沖縄)、かめおか霧の芸術祭(京都)など。京都を拠点に活動。

芸術系大学シラバスのアーカイブ

本研究プロジェクトは2022年度より新たに開始したものであり、初年度の報告である本稿では、まず実施に至る契機、およびその狙いを示す。

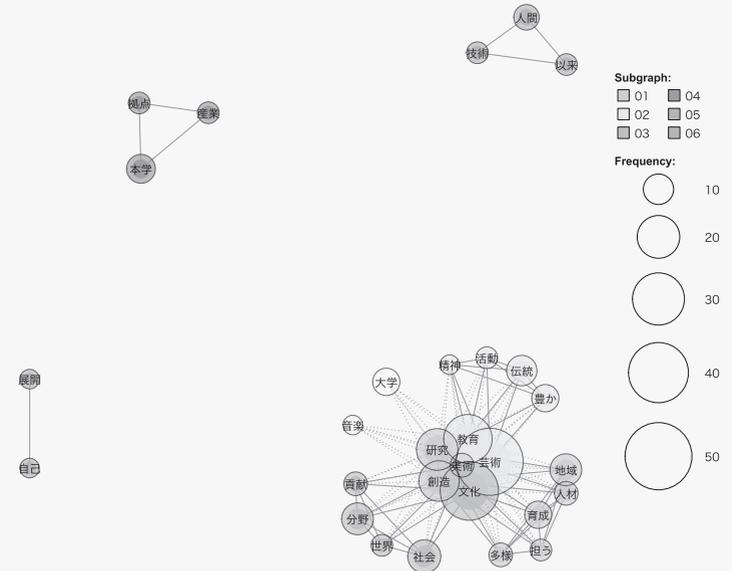
大学入学時に配布される分厚い授業内容リストである印刷されたシラバスとにらめっこしながら履修する授業を選んでいくという光景は過去となりつつある。大学からの配布物のなかでもそれなりの重量を占めるシラバスは、前期後期の授業選択の瞬間こそにらめっこよろしく詳細に見られるが、それ以外に読まれることは少なく、新年度の新たなシラバスが到着するとともに忘れられ、個人レベルでは廃棄されてしまうことが多い。文書保管・アーカイブの観点からすると、大学シラバスの位置づけが難しい。筆者は別大学にて教育史調査の一環としてシラバスの保存状況を調べたことがある。大学全体での規定はあるものの、各部署で自主的に保存していたり、スペースの関係で破棄されていたりすることがあった。いずれも「なんとなく大事そうだからとっておく」が「多分他のところでも保存している」ので廃棄の可能性がある、あるいは実際に廃棄されていたという状況であった。近年では履修登録のオンライン化が定着し、シラバスもウェブ上で他大学分も含め参照できるようになっている一方で、当該年度を過ぎたシラバスについては非公開となるなど、かならずしもアクセスがしやすくなったとは言えない。これは年度更新されるようなドキュメントに共通の課題ともいえる。

一方でシラバスは授業内容だけでなく、大学の教育・研究方針、望ましい学生像など、受験生、在学生、そして社会に対してのいわばステートメントが含まれる場合もある。芸術系大学における学生の教育とはどのようなものか、という共通理解がとれているかの判断は、特に外野からは難しい。参考として、

日本学術会議が「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準」を分野別に公開しており、芸術関連では哲学分野で美学芸術学について言及されているなどしているが、制作を中心とした内容については現時点でも公表されておらず、共通認識の共有の難しさが伺える。シラバスという限定された内容ではあるが、その歴史の変遷などを後年チェックし、芸術の教育研究とはどのようなものかという問いに対する資料が必要であろう。以上の観点から、その基礎資料作成としてアーカイブ作業を本プロジェクトとして実施することとした。

本年度は初年度ということで、全体の調査・研究を実施するための状況把握がメインとなった。まず事前調査もふくめ京都市立芸術大学におけるシラバスの残存状況確認の調査を行った。2023年のキャンパス移転に伴い様々な資料の整理が行われており、その中で事前調査で確認できていたものが移動・箱詰めされていたケースがあった。芸資研に一部シラバスが引き取られており、アーカイブ作業は作業スペースも考慮して芸資研の撮影スペースにて行うこととした。将来のアーカイブ公開およびそれをを用いた研究利用を念頭に入れ、OCRによるテキスト化に耐えられる画像解像度を設定した。年度末にむけて学生補助による撮影を実施する予定である。作業量から次年度以降も断続的に実施予定である。

京都市立芸大のシラバス調査と並行して、国内の各芸大におけるシラバスの調査、教育方針に関するドキュメントの調査も行っている。本年度はディプロマポリシー・望む学生像といった部分に絞って、現在公開されているものの情報収集を行っている。得られたデータは計量テキスト分析などを用い、芸術



国内の国立芸術大学（一部）における教育理念・ポリシーなどの簡易的な計量テキスト分析の例。
KH Coderを用いて共起ネットワークを表示させた。
なお、簡易的に行ったものであり、今後改定されるものであることに注意されたい。

教育における先行研究との比較分析を実施、まとめる予定である。簡易的に分析した内容からは、地域性についての言及が複数あるなど、必ずしも教育研究の観点に限定されない視点も伺え、翻ってステートメントとしての教育研究理念が表出しているともいえる。また、シラバスなどの保存規定について、芸術系以外の大学も含めて情報収集を実施している。概ね5年程度の保存義務を課していることが判明しているが、担当部局、その後の処理に関しては明示されているとは限らず、引き続き調査が必要である。

今後の方針としては、引き続きシラバスのデジタルアーカイブ化とそれをもちいた実践的研究を実施する。上述の通りシラバスの撮影はテキストデータのOCR処理を念頭に置いたものであり、実際に利用するうえでIIIFな

どを念頭に入れたアーカイブの構築そのものにも手を入れる必要がある。また、美術学部関連のシラバスが完了したのちは音楽学部関連についても同様に調査・アーカイブ化を検討する。

2023年度も引き続き申請・実施予定であるが、キャンパス移転に伴い撮影の実施場所が確保可能か、また資料が手に届きやすい状況になるかは不透明であるため、芸資研スタッフと密に連携を取って実施したい。また、シラバスに直接影響を受ける学生の助力も必要であるが、年度後半、とくに年末年始をはさんだ時期は本学学生が作品制作に時間を割く時期であり、プロジェクト資金支給の決定タイミングと実施計画についてあらかじめ織り込んだうえでの実行を図りたい。

(玉澤春史)



左から壺美智子氏、原久子氏、松尾恵氏

第37回アーカイブ研究会

沓掛アーカイバル・ナイト〈第1回〉

沓掛時代から平成美術へ：アートと社会システムとわすれたくない作品

054

講師：松尾 恵（ギャラリスト/MATSUO MEGUMI+VOICE GALLERY pfs/w主宰）

原 久子（アートプロデューサー/大阪電気通信大学教授）

開催日時 | 2022年10月21日（金）18:00～20:00

会場 | 伝音合同研究室1（新研究棟7階）

来年度の崇仁地区への本学移転に際し、芸資研では1980年から2023年までの43年間の「沓掛時代」を多彩なゲストとともにふりかえるトーク・シリーズ「沓掛アーカイバル・ナイト」を今年度より企画している。第一回目のゲストは、本学卒業生であり、1986年に「ヴォイス・ギャラリー」を立ちあげて以来、多くの表現者たちに活動と発表の場を提供しつづけてきた松尾恵氏と、関西を対象とした現代美術の批評誌『A&C: art & critic』（1987年創刊）など様々なかたちでアート・マネジメントに携わってきた原久子氏をお招きした。「沓掛時代」を「美術をめぐる様々なシステム化が進んでいく時代」ととらえ、両者の視点からこの時代を振り返る機会としていただいた。

1 「関西アートシーンから見た沓掛時代」

まず原氏から、アート・プロデューサーとして関西のアートシーンを俯瞰してきた外側の視点からお話いただいた。インターネット誕生以前、1980年代は「ニューアカデミズム」、「ポストモダン」などの活発な言論も後押しして「雑誌の時代」となったが、同時代のアートシーンを紹介する役割も雑誌が担ったという。だが、原氏によると、出版メディアは首都圏に集中しており、『美術手帖』などの月刊誌では関西の情報はあまり紹介されなかったため、当時「西高東低」^[1]と呼ばれた関西方面のアーティストが活躍している状況を伝える雑誌は不足していた。

関西には芸術系大学・教育大学の芸術系学部が多数あり多くの作家が輩出されたという背景もあるが、とりわけ京芸出身者の作品は当時外から見ていた同世代の原氏の間からも興味深いものだったという。関西の作家の活動を数多く紹介し、創作と批評の若い才能を交差させる目的で創刊された批評誌『A&C: art & critic』^[2]では、原氏が編集を務め、本学出身者のインタビューを多く手がけている。また原氏の参加した企画で、首都圏以外の作家を集めた「ドーナッツ」展（ワタリウム美術館 オン・サンデーズ、1999年）では、伊藤存、カワイオカムラらの卒業生が紹介された。京都の作家はマーケットに左右されない分、作品を深く醸成することができると見ていたそうだ。

『A&C: art & critic』の目次を一例として紹介していただいたが、当時よく使われていた「平面」（絵画、書、写真）や「立体」（彫刻）という用語からは形態等へのこだわりが読み取れるという。また「クレイワーク」（陶立体）や「テキスタイル」（染色）という用語もしばしば用いられており、そうしたマテリアル（素材）や形態別に顕彰制度（賞）や企画展がおこなわれていた。「インスタレーション」を問う議論が頻繁におこなわれたのも、この時代の特徴だという。

アーティストをとりまくインフラ状況（社会システム）に目を向けると、京都市街地にあるギャラリーが大学の外の世界との接続点となり、時代ごとの各種の顕彰・助成制度（文化庁在外派遣研究制度、ACC、安井賞、VOCA展、京展等）、また90年代以降には企業メセナが盛んとなって、卒業後の発表の受け皿となってきた。沓掛時代の約40年間にはそうした制度が増加しており、交換留学やアーティストインレジデンスなどの仕組みも90年代以降に整ってきた。京都芸術センター（2000年）や@KCUA（2011年）がオープンするなど、ギャラリーや美術館ではないオルタナティブな発表場所が加わったことも大きな変化として挙げられる。1980年代から現代にかけて、そのように作家のキャリアを支え

る諸々のシステムが整備されたことが確認されたが、原氏からは近年のアートフェスティバルのありかたについて、昔の団体展に近づいてきているのではという懸念も述べられた。

2 「わたし（たち）はどうサバイブしてきたか」

松尾氏からは、原氏から概説いただいたようなシーンの内側で活動した一作家として、個人的な体験を踏まえてお話していただいた。大学が沓掛に移転した1980年には、第一次テクノブームが起り、ニューベインティングが隆盛するなど、若者のカルチャーに衝撃を与える出来事が次々と起こった。松尾氏自身も『美術手帖』1982年の「インスタレーション」特集号や1986年の「美術の超少女たち」の特集号で取り上げられ（作品画像の横にはポートレート写真がカラーで掲載された）、女性作家の活躍に注目が集まることで、それまでの怖くて近づき難いようなアーティスト像を覆し、一般の若者の考えるアーティスト像が身近なものに変わった時代だったという。

1980年に本学を卒業した松尾氏は、学生時代を過ごしたのは今熊野学舎だが、その多くのエッセンスは沓掛学舎にも引き継がれたと話す。学生時代の活動、三美祭（五芸祭の前身）、卒業後の展覧会、ギャラリーを開いてからの様子など、当時の写真を見せていただきながらふりかえていただいた。学生の時、松尾氏はバスケット部に所属し、練習や合宿など部活仲間との結びつきも強かったという（バスケット部の先輩たちが「GOOD ART」を結成した際にも展示に誘われて参加している）。芸祭では、自転車（京大西部講堂の放置自転車を拝借）を改造した山車をつくり仮装行列で四条河原町を練り歩いた^[3]。

卒業後は、京都大学の解剖学研究室やギャラリーでアルバイトをしながら作家活動を続け、1986年にVOICE GALLERY（現「MATSUO MEGUMI +VOICE GALLERY pfs/w」）を開くことになる。当時の松尾氏はアーティストでもあったため、VOICE GALLERYは貸画廊の

055

形を借りているが、表現者の生き方をサポートする一種のアーティスト・ラン・スペースだった。レンタル代を安くした反面、お金の工面に苦労し、他のアーティストを代弁することにも価値観の違いからジレンマを感じたようだ。だが、1986年頃は沓掛で学んだ学生たちが発表場所を探していた時期でもあり、レンタル代の安いVOICE GALLERYでたくさんの卒業生が展覧会を開くことができた。夜遅くまで出入りができ、壁を塗ったりすることも可能な自由度が高いスペースが、他では断られてしまうような“やんちゃ”な表現を許容したという（一例として、初期に展示をした作家に、1967年生まれ世代である高嶺格、南琢也、西松鉦二がいる）。当時の常識的アートシーンからすれば「はみだしもの」ばかりで、VOICE GALLERYは「不良の溜まり場」と陰で呼ばれたそうだが、逸脱の証として勲章のように感じてきたようだ。実際、展示をした作家の活躍が目立ち始めると、ギャラリーの活動にも評価が向けられるようになった（ソニー・ミュージックエンタテインメント主催「アート・アーティスト・オーディション」では、1992年第一回グランプリに西松鉦二、1993年第二回準グランプリに高嶺格が選ばれた）。

1990年頃には、京都市主催の「芸術祭典・京」事務局でアシスタントをし、演劇、音楽、現代美術、学生（美術関係大学8校の卒制選抜展）の各部門に携わりながら、行政的な手続きを要する仕事を覚えた。1990年に文化庁芸術文化振興基金が創設されて以来、助成金制度を利用するようになり、またVOICE GALLERYの隣にオフィスを構えたDumb Typeが、セゾンなど企業からの助成を得て活動の幅をどんどん広げていく様子を目の当たりにすることにもなった。オルタナティブな活動をする上で、そうしたアーティスト支援の社会システムをフレキシブルに利用していく（サブバイプしていく）ことの重要性を感じたという。

松尾氏の発表に対し原氏からは、現在の視点で「アーティスト・ラン」、「オルタナティブ」と言えるような活動がこの時期に数多く

起こり、いい意味で“やんちゃ”=型にはまらない自由さがあったが、それは社会的な環境が発展途上だったからこそその表現ではないかと所感が述べられた。

3 「ふたりの平成美術（1989～2019）」

後半の対談では、1980年代以降のアートに注目が集まっている状況^[4]を踏まえて、おふたりにとっての沓掛時代（≒「平成美術」）を振り返っていただいた。当時の両氏の身近では、Dumb Typeメンバーら沓掛キャンパス出身者を中心とするAIDSポスタープロジェクトや、その周辺の多様な活動が起こっていた。それらはプロジェクト・ベースで議論のきっかけを作ることを目的としていたため、これまでは「作品」と捉えられず「美術未満」の活動とされてきたという。両氏も参加した、女性が女性のためにダイアリーを作るプロジェクト「Woman's Diary Project」なども、単に手帳というプロダクトの共同での編集作業とみなされがちだったが、昨今のソーシャリー・エンゲージド・アートの文脈では活動のプロセス、インタラクション、継続性やそのアウトプットの仕方なども踏まえて評価されていることから、アートの実践ととらえ直すこともできるのではないかと話された。

80年代から平成の時代にかけて様々な社会的問題が噴き出し、それに作家達も応答して反権力的であったりマイノリティを擁護したりする活動が盛んになされ、多くのプロジェクトが現れた。アクティビズムかアートかの二者択一ではなく、自立する人間としてその時々で積極的に関わっていく可能性が重要だと松尾氏は指摘する。特に、マイノリティの権利について活動するには覚悟を要する時代だったため、正当に評価されなかった（損をした）作家も少なくないという。近年のドクメンタやヴェニス・ビエンナーレの傾向など、社会変革の意識を持つアートが国際舞台で取り上げられるケースも増えている現代の視座から、平成の時代に、拾い上げられないまま慌ただしく目的的に流

されてしまったような問題を振り返り、再評価していきたいと両氏は語る。

また、マイノリティの表現だけではなく、メディア・アートやインスタレーションの作品等、この時代に新興した表現もレンタル・ギャラリーという仕組みがあったから生き残ることができたと指摘された。一方ではパブルの時代でもあり、コマーシャル・ギャラリーでは販売のしやすさを想定した作品が扱われがちだったが、そうしたシーンに迎合しない活動を支えた、“おばちゃん”的面倒見の良さが特徴とされる京都のレンタル・ギャラリーの存在は大きいという。評価を得て後にカテゴライズされていった表現であっても、出てきた当時は未分類で何者とも呼べないようなもので、作品未満の過程で作家自身がそれをしなければならぬような必然性があるために生み出されてきた。芸術大学という場所がそうした「出てくる時代を間違えた」ようなオルタナティブな表現を醸成し、大学の多い京都では異分野の知とアートの自然な交流が生まれやすかったことも、時代を拓く表現の土壌にあったと語られていた。おふたりのお話によって像を結んできた沓掛時代の京都芸大の姿を踏まえ、崇仁キャンパスでの次なる時代の本学のありかたを見通す一助とできれば幸いである。

（樋 美智子）

[1] 「西高東低」の状況を伝えるインタビュー集として本レクチャーでは下記が紹介された。畑祥雄『西風のコンパスたち 若き美術家たちの肖像』ブレンセンター発行、1985年。

[2] 京都芸術短期大学（現・京都芸術大学）発行。編集委員は、本学の学長も務めた建昌哲（元・国立国際美術館館長、現・多摩美術大学学長）、京都大学で教鞭を振った篠原資明（現・高松市現代美術館館長）が務めている。

[3] 学生時代から松尾氏はバイクに乗る姿でも有名だったが、バイク事故のため卒業で展示できず、保険金でギャラリー16で個展を開催したという武勇伝も。

[4] 「起点としての80年代」（金沢21世紀美術館・高松市美術館・静岡市美術館を巡回、2018-19年）、「平成美術」（京都市京セラ美術館、2021年）、「関西の80年代」（兵庫県立美術館、2022年）など、この時代を特集する企画展が相次いで開催されている。



VOICE GALLERY開業当時の様子
（写真提供：松尾 恵）



研究会の記録は「芸資研YouTubeチャンネル」でご覧ください。

第36回アーカイブ研究会については、本号本編の146頁～150頁をご覧ください。

よりあいのまとめ

アーカイブ研究会

1 | 写真とアーカイブ：旅行写真、鉄道写真を例として

佐藤守弘（京都精華大学デザイン学部教授）
2014年6月25日

2 | それってテクノロジーと何の関係があるの？

バーバラ・ロンドン（キュレーター）
2014年8月2日

3 | 記憶／記録／価値 ミュージアムとアーカイブの狭間で

平芳幸浩（京都工芸繊維大学美術工芸資料館准教授）
2014年9月30日

4 | ダイアグラムと発見の論理 アーカイブに眠る『思考のイメージ』

田中 純（東京大学大学院総合文化研究科教授）
2014年10月31日

5 | アーティストはいつか作品を作るのをやめ、資料を作り始めている

田中功起（アーティスト）
2014年12月8日

6 | チェルノブイリ・ダークツーリズムの実践から

東 浩紀（思想家・作家）
2014年12月17日

7 | 映画『ASAHIZA 人間は、どこへ行く』上映＋トーク

藤井 光（映画監督・美術家）
2015年1月19日

8 | 唯一のひとつを集積すること

笠原恵史（作家）
2015年4月24日

9 | 文化の領野と作品の領野 アーティファクトとしての視覚文化

石岡良治（批評家）
2015年10月23日

10 | 映像民族誌とアーカイブの可能性

記録映画『スカラニエスカラ〜パリの音と陶酔の共鳴〜』上映＋レクチャー

春日 聡（美術家、映像・音響作家、映像人類学研究者）
2015年12月8日

11 | 歴史をかきまわすアーカイブ

黒ダライ兒（戦後日本前衛美術研究家）
2016年1月18日

12 | 不完全なアーカイブは未来のプロジェクトを準備する

奥村雄樹（アーティスト、翻訳家）
2016年2月23日

13 | インターローカルなアーカイブの可能性

川俣 正（美術家）
2016年7月22日

14 | ものが要請するとき加速する

木村友紀（美術家）
2016年10月27日

15 | アール・ブラウン音楽財団—理念、記録、プロジェクトとアクティビティ

トーマス・フィヒター（アール・ブラウン音楽財団ディレクター）
2016年11月30日

16 | IT IS DIFFICULT

アルフレッド・ジャー（アーティスト、建築家、映像作家）
2017年4月25日

17 | エイズ・ポスター・プロジェクトを振り返る

小山田 徹（美術学部教授、佐藤知久（芸術資源研究センター准教授）、ブド・ラ・マドレーヌ（美術家）
2017年5月17日

18 | 5叉路

前田岳亮（アーティスト）
2017年6月21日

19 | 1960〜70年代に見られる芸術表現の研究拠点形成と資料アーカイブの構築

伊村靖子（情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 講師、国立新美術館客員研究員）
2017年12月9日

20 | Week End / End Game: 展覧会の制作過程とその背景の思考について

田村友一郎（アーティスト）、服部浩之（キュレーター）
2018年1月11日

21 | コミュニティ・アーカイブをつくらう！ せんだいメディアテーク「3がつ11にちをわすれないためにセンター」審議記

甲斐賢治（せんだいメディアテークアーティスト）、北野 央（公益財団法人仙台市市民文化事業団 主事）、佐藤知久
2018年9月28日

22 | NETTING AIR FROM THE LOW LAND 空を編む—低い土地から

渡部睦子（アーティスト）
ライブ・パフォーマンス|MAMIUMU
2018年10月4日

23 | 日本の録音史（1860年代〜1920年代）

細川周平（国際日本文化研究センター教授）、古川綾子（国際日本文化研究センター助教）
2018年10月11日

24 | 特集展示「鈴木昭男 音と場の探究」をめぐって

奥村一郎（和歌山県立近代美術館学芸員）、鈴木昭男（サウンド・アーティスト）
2018年12月16日

25 | シリーズ：トラウマとアーカイブ vol.1 | 《シャンデリア》自作を語る—近代歴史の中で生き残った人々の話から

衰 相順（美術作家）
2019年10月8日

26 | シリーズ：トラウマとアーカイブ vol.2 | parallax（視差）—「向こう側」から日本を見る

高嶋 慈（芸術資源研究センター非常勤研究員）
2019年10月24日

27 | シリーズ：トラウマとアーカイブ vol.3 | このまへのドクメンタって結局なんだったのか?!

石谷治寛（芸術資源研究センター非常勤研究員）
2019年12月17日

28 | シリーズ：トラウマとアーカイブ vol.4 | ロマの進行形アーカイブとしてのちぐはぐな住居

岩谷彩子（京都大学大学院人間・環境学研究科准教授）
2020年2月18日

29 | シリーズ：デジタル時代の〈記憶機関〉vol.1 | デジタル時代の記憶機関—イントロダクション

佐藤知久
2020年10月16日（オンライン配信）

30 | シリーズ：デジタル時代の〈記憶機関〉vol.2 | プラットフォームとしての図書館の役割 コロナ禍で露呈した物理的な公共空間としての弱さ

佐々木美緒（京都精華大学人文学部准教授）
2020年10月28日（オンライン配信）

31 | シリーズ：デジタル時代の〈記憶機関〉vol.3 | 美術館の資料コレクションは誰のもの？

松山ひとみ（大阪中之島美術館学芸員・アーキビスト）
2020年11月10日（オンライン配信）

32 | シリーズ：デジタル時代の〈記憶機関〉vol.4 | 世界劇場モデルを超えて

桂 英史（東京藝術大学大学院映像研究科教授）
2020年11月16日（オンライン配信）

33 | 360° 展覧会アーカイブ事業 「ART360°」の実践を通じた考察

辻 勇樹（Actual Inc. 代表取締役／ART 360° ディレクター）
2020年12月18日（オンライン配信）

34 | 「失われた絵画とアーカイブ 宇佐美圭司絵画の廃棄処分への対応について」

加治屋健司（東京大学大学院総合文化研究科教授、東京大学芸術創造連携研究機構副機構長、京都市立芸術大学芸術資源研究センター特別招聘研究員）
2021年6月21日（収録）、7月21日（配信開始）

35 | 吉田亮人チェキ日記展と第35回アーカイブ研究会

吉田亮人（写真家）、松本久木（松本工房代表、グラフィックデザイナー）
展示 | 2021年8月24日-29日
会場 | 京都市立芸術大学 小ギャラリー
研究会 | 2021年8月28日（オンライン配信）

36 | 西洋美術史研究と芸術資源—目録やテキストが伝える情報

大熊夏実（京都市立芸術大学・博士後期課程）、深谷訓子（美術学部 総合芸術学科 准教授）、倉持充希（神戸学院大学 講師）、西嶋亜美（尾道市立大学 准教授）、今井澄子（大阪大谷大学 教授）
研究会 | 2022年8月5日（オンライン配信）

37 | 春掛アーカイバル・ナイト〈第1回〉春掛時代から平成美術へ：アートと社会システムとわすれたくない作品

松尾 恵（ギャラリスト、ヴォイスギャラリー）、原 久子（アートプロデューサー、大阪電気通信大学教授）
2022年10月21日

特別授業

1 | 横盗り物語／ヨコハマトリエンナーレに託すもの
森村泰昌（美術家）
2014年7月7日

2 | [読めるものと読めないもの2] Artist Book をつくる

塩見允枝子（音楽家、作曲家、芸術資源研究センター特別招聘研究員）
2014年11月21日

3 | 美術のウラ側にあるもの

杉子女王殿下（芸術資源研究センター客員研究員・特別招聘研究員）
2014年12月12日

4 | 3.11後に企画した展覧会とプロジェクト あいちトリエンナーレ2013を中心に

五十嵐太郎（東北大学大学院工学研究科教授）
2015年6月8日

5 | フルクサス パフォーマンス・ワークショップ〜実演を通してフルクサスを体験しよう〜

塩見允枝子
2015年6月16日

6 | 国際展とキュレーション 今年のヴェネチア・ビエンナーレをふまえて

建畠 哲（多摩美術大学学長、芸術資源研究センター客員教授）
2015年7月23日

7 | コレクションと芸術

杉子女王殿下
2015年10月7日、14日、21日、28日

8 | 壁画は何をうつすのか 法隆寺金堂 壁画の模写を通して

杉子女王殿下
2016年12月8日

9 | 塩見允枝子「水を演奏する」2017

塩見允枝子
2017年11月17日

10 | 日本文化を考える〜明治の選択〜

杉子女王殿下
2018年12月5日、12日

11 | 塩見允枝子「時間と空間に分け入る」〜フルクサス作品の演奏をとおして〜

塩見允枝子
2019年10月30日

12 | 日本文化を考える〜令和からまなぶ〜

杉子女王殿下
2019年11月27日、12月11日

13 | 日本文化を考える〜令和からまなぶ〜

杉子女王殿下
2021年12月13日

講演会

1 | イタリア未来派 芸術の革命
ルチャーナ・ガリアーノ（音楽学者、音楽美学者）
2015年11月20日

2 | 伝統音楽における記譜について

藤田隆則（日本伝統音楽研究センター教授）
2016年2月17日

3 | 歴史的音源で検証するピアノ黄金期の音色「ショパンが弾いたピアノはどんな音色だった？」〜直系の弟子達の歴史的録音で検証するショパンの実像〜

梅岡俊彦（古典鍵盤楽器技術者、音楽学部非常勤講師）、松原 聡（ピアニスト、ピアノ史研究家）
2020年11月13日

4 | 歴史的音源で検証するピアノ黄金期の音色「ショパンが弾いたピアノはどんな音色だった?」〜約百年前のピアノ銘器11種類の音色聴き比べ〜

梅岡俊彦、松原 聡
2021年12月17日

5 | 歴史的音源で検証するピアノ黄金期の音色ーピアノ黄金期の2大ピアノ産地「ドイツ」「フランス」の音色聴き比べ！

梅岡俊彦（古典鍵盤楽器技術者、音楽学部非常勤講師）、松原 聡（ピアニスト、ピアノ史研究家）
2022年10月26日（水）

レクチャーコンサート

1 | バロック時代の音楽と舞踏 記譜を通して見る華麗なる時空間

レクチャー | 柿沼敏江（音楽学部教授）、高野裕子（芸術資源研究センター非常勤研究員）、三島 郁（音楽学部非常勤講師）、赤塚健太郎（成城大学文学部芸術学科専任講師）
演奏 | 樋口裕子（バロック・ダンス）、永野伶美（フルート）、大内山薫（ヴァイオリン）、頼田 麗（ヴィオール）、三橋 桜子（チェンバロ）
日時 | 2015年10月18日
会場 | 京都市立京都堀川音楽高等学校音楽ホール

2 | 五線譜に書けない音の世界ー声明からケージ、フルクサスまで〜

レクチャー | 柿沼敏江、藤田隆則、竹内 直（芸術資料研究センター非常勤研究員）、塩見允枝子
演奏 | 大井卓也（ヴォイス）、上中あさみ（打楽器・ベル）、北村千絵（ヴォイス）、佐藤 響（チェロ）、寒川晶子（電子ピアノ・トイピアノ）、鷹阪龍哉（声明）、椿爪皓佐（ギター）
美術 | 二瓶 晃
日時 | 2017年2月26日
会場 | 京都市立芸術大学ギャラリー @ KCUA

資料展示

1 | 古橋徳二《LOVERSー永遠の恋人たち》展示・修復資料展示

日時 | 2016年7月9日-24日
会場 | 京都芸術センター 講堂（作品展示）、談話室（資料展示）

主催 | 京都芸術センター（作品展示）、芸術資源研究センター（資料展示）

2 | Sujin Memory Bank Project # 01 デラシネー根無しの記憶たち

日時 | 2016年11月12日-2017年2月19日
企画 | 林田 新（芸術資源研究センター客員研究員）、高橋耕平（アーティスト）
会場 | 柳原銀行記念資料館
主催 | 芸術資源研究センター、柳原銀行記念資料館

3 | シンポジウム「過去の現在の未来2」関連展示

日時 | 2017年11月21日-29日
会場 | 兵庫県立美術館 アトリエ 1
主催 | 芸術資源研究センター、國府理「水中心エンジン」再制作プロジェクト実行委員会、兵庫県立美術館

4 | 京都芸大「今熊野・岡崎学舎」井上隆雄写真展—もう一つの『描き歌い伝えて』—井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブ実践研究

日時 | 2018年2月7日-11日
企画 | 山下晃平
会場 | 元崇仁小学校 南校舎2F
主催 | 芸術資源研究センター
協力 | 小牧徳満（美術家）

5 | Akira Otsubo「Shadow in the House」

日時 | 2018年3月22日-31日
会場 | 京都市立芸術大学 小ギャラリー
企画 | 高嶋 慈
主催 | 芸術資源研究センター

6 | クロニクル京都 1990sーダイアモンズ・アー・フォーエバー、アートスクープ、そして私は誰かと踊る

日時 | 2018年10月6日-2019年1月20日
会場 | 森美術館
主催 | 森美術館
企画 | 椿 玲子（森美術館キュレーター）、石谷治寛
協力 | 芸術資源研究センター、プブ・ドラ・マドレーヌ（アーティスト）、山中 透（ミュージシャン）、シモヌ 深重（シャンソン歌手、ドラアグイーン）、佐藤久久

7 | 崇仁小学校展：記憶のひきだし 見返りすうじん

日時 | 2020年3月20日-31日
会場 | 元・崇仁小学校
主催 | 京都市立芸術大学・崇仁小学校
会場 | 京都芸術センター プロジェクト 共催 | 崇仁自治連合会、崇仁発信実行

委員会

8 | パシェ音響彫刻 特別企画展

日時 | 2020年11月7日-12月20日
会場 | 京都市立芸術大学ギャラリー @ KCUA
主催 | 京都市立芸術大学
企画 | 芸術資源研究センター パシェ音響彫刻プロジェクト
共催 | 東京藝術大学ファクトリーラボ 協力 | 大阪府、万博記念公園マネジメント・パートナーズ（BMP）、パルセロナ大学、L'association Structures Sonores Baschet（フランスパシェ協会）、パシェ協会（日本）

9 | 柳原銀行記念資料館2020(令和2)年度企画展「夢の新幹線、吾闘の住宅建設運動ー自主映画「東九条」の世界3〜」

日時 | 2021年3月3日-31日
会場 | 柳原銀行記念資料館
主催 | 京都市、柳原銀行記念資料館運営委員会
協力 | 芸術資源研究センター 崇仁小学校を忘れないためにセンター

10 | 井上隆雄「インド・ラダク仏教壁画」資料展ー井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究ー蘇る天空の密教図像

日時 | 2021年3月23日-28日
会場 | 京都市立芸術大学 小ギャラリーー及びWebサイト
主催 | 芸術資源研究センター 井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究
協力 | 芸術資源研究センター
助成 | DNP文化振興財団 グラフィック文化に関する学術研究助成

シンポジウム

1 | 創造のためのアーカイブズ Part1 未完の歴史

森村泰昌（美術家）、塩見允枝子（音楽家）、加治屋健司（広島市立立大学芸術学部准教授）、石原友明（美術学部教授）、加須屋明子（美術学部准教授）
日時 | 2012年10月7日
会場 | 京都市立京都堀川音楽高校 音楽ホール

2 | 創造のためのアーカイブズ Part2 物質と記憶

下條信輔（カリフォルニア工科大学教授）、篠原真樹（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）、建昌 哲（京都市

立芸術大学学長）、高橋 悟（美術学部教授）
日時 | 2012年11月7日
会場 | 京都芸術センター フリースペース

3 | 富本憲吉のことは

乾 由明（元兵庫陶芸美術館館長）、前崎信也（立命館大学専門研究員）、森野泰明（陶芸家、日本藝術院会員）、柳原睦夫（陶芸家、大阪芸術大学名誉教授）、山本茂雄（富本憲吉文化資料館館長）、森野彰人（美術学部准教授）
日時 | 2013年12月1日
会場 | 京都国立近代美術館 講堂

4 | 京都市立芸術大学芸術資源研究センター開設記念シンポジウム

井上安寿子（京舞井上流）、建昌 哲、門川大作（京都市長）、中村三之助（京都市会議長）、金剛龍護・宇高竜生・宇高徳也（能楽金剛流シテ方）、京都市立芸術大学能楽部、藤田隆則（日本伝統音楽研究センター教授）、石原友明、柿沼敏江（音楽学部教授）、加治屋健司（芸術資源研究センター准教授・専任研究員）、鷲田清一（哲学者、大谷大学教授）、定金計次（美術学部教授・芸術資源研究センター所長）
日時 | 2014年7月1日
会場 | 京都市立芸術大学 講堂

5 | 来たるべきアート・アーカイブ 大学と美術館の役割

建昌 哲、青木 保（国立新美術館館長）、石原友明、川口雅子（国立西洋美術館情報資料室長）、谷口英理（国立新美術館情報資料室アシエイトフェロー）、渡部葉子（慶應義塾大学アート・センター教授）、林 道郎（上智大学国際教養学部教授）、加治屋健司、定金計次
日時 | 2014年11月24日
会場 | 国立新美術館 3階講堂

6 | ほんまのところはどうなん、「アーカイブ」〜初心者にもわかるアーカイブ論〜

石原友明、加治屋健司、加須屋明子、佐藤守弘（京都精華大学デザイン学部教授）、林田 新（芸術資源研究センター非常勤研究員）、森村泰昌
日時 | 2015年9月19日
会場 | 京都芸術センター 講堂
共催 | 京都芸術センター

7 | 過去の現在の未来 アーティスト、学芸員、研究者が考える現代美術の保存と修復

山梨俊夫（国立国際美術館館長）、石原友明、植松由佳（国立国際美術館主

任研究員）、金井 直（信州大学人文学部准教授）、マルティ・ルイツ（サウンド・アーティスト、パルセロナ大学美術学部研究員）、加治屋健司
日時 | 2015年12月5日
会場 | 国立国際美術館 B1 講堂
共催 | 国立国際美術館

8 | メディアアートの生と転生 保存修復とアーカイブの諸問題を中心に

石原友明、高谷史郎、加治屋健司（芸術資源研究センター特別招聘研究員・東京大学大学院総合文化研究科 超域文化科学専攻教授）、久保田晃弘（多摩美術大学美術学部教授）、畠中 実（NTTインターコミュニケーション・センター学芸員）、松井 茂（情報科学芸術大学院大学准教授）、佐藤守弘
日時 | 2016年2月14日（日）
会場 | 元崇仁小学校

9 | 古橋徳二《LOVERSー永遠の恋人たち》をめぐるトークイベント

阿部一直（山口情報芸術センターキュレーター/アーティストニック・ディレクター）、石谷治寛、石原友明、住友文彦（キュレーター/アーツ前橋館長）、高谷史郎（アーティスト）、建昌 哲（京都芸術センター館長）
日時 | 2016年7月18日
会場 | 京都芸術センター フリースペース

10 | 過去の現在の未来 2 キュレーションとコンサベーション その原理と倫理

石原友明、遠藤水城（インディペンデント・キュレーター）、白石晃一（アーティスト、ファブラボ北加賀屋）、高嶋 慈、相澤邦彦（兵庫県立美術館保存・修復グループ学芸員）、加治屋健司、田口かおり（東海大学創造科学技術研究機構特任講師）、中井康之（国立国際美術館学芸課長）、小林 公（兵庫県立美術館学芸員）、飯尾由貴子（兵庫県立美術館企画・学芸部門マネージャー）
日時 | 2017年11月23日
会場 | 兵庫県立美術館 ミュージアムホール
主催 | 芸術資源研究センター、國府理「水中心エンジン」再制作プロジェクト 実行委員会、兵庫県立美術館

11 | フルクサスを語る

柿沼敏江、一柳 慧（作曲家）、塩見允枝子、建昌 哲（美術評論家、多摩美術大学学長）、井上明彦（美術学部教授）
演奏 | 大井卓也、上中あさみ、北村千絵、椿爪皓佐、山根明季子、ヤリタミ 紗コ、本学学生12名
日時 | 2019年1月19日

会場 | 京都市立芸術大学
大会会館交流室、大会会館ホール

12 | シンポジウムとコンサート「糸が紡ぐ音の世界」

伊藤 藤（国立民族学博物館外来研究員）、井上 航（国立民族学博物館外来研究員）、滝 奈々子（芸術資源研究センター非常勤研究員）、谷 正人（神戸大学）、藤野靖子（美術学部教授）、佐藤 知久（芸術資源研究センター准教授）、柿沼敏江、藤枝 守（九州大学芸術工学研究院教授）
演奏 | 中川佳代子、丸田美紀、大八木幸恵、渡部志津子（十七弦箏）
録音 | 山口友寛
日時 | 2019年2月16日
会場 | 京都市立芸術大学
大会会館交流室、大会会館ホール

13 | デジタル時代の《記憶機関》ー芸術／大学における図書館・美術館・アーカイブ

桂 英史（東京藝術大学大学院映像研究科教授）、佐々木美緒（京都精華大学人文学部准教授）、松山ひとみ（大阪中之島美術館学芸員・アーキビスト）、森野彰人（芸術資源研究センター所長・美術学部教授）、佐藤知久（芸術資源研究センター教授）
日時 | 2020年11月28日（オンライン配信）

14 | 富本憲吉『わが陶器造り』

Meghen M. Jones（アルフレッド大学准教授）、鈴木禎宏（お茶の水女子大学生活科学部准教授）、前崎信也（芸術資源研究センター客員研究員、京都女子大学生生活造形学科准教授）、森野彰人
日時 | 2021年2月3日 オンライン配信開始

ワークショップ

1 | 「リ्यूト・タブラチュアの記譜法を考えるー鳴ると記すのあわい」

笠原雅仁（古楽器奏者、声楽家）、岡田加津子（作曲家、音楽学部教授）、三島 郁（音楽学者、音楽学部非常勤講師）
企画 | 芸術資源研究センター「音と身体

2 | 「音と身体の記譜研究」プロジェクト企画 | 柴田南雄のシアター・ピース考 |

竹内 直（音楽学、芸術資源研究センタ

一非常勤研究員)、徳永 崇(作曲家、広島大学大学院准教授)、滝 奈々子(芸術資源研究センター非常勤研究員)
 日時 | 2023年3月4日
 会場 | 京都市立芸術大学学生会館ホール

(2023年3月10日現在)

芸術資源研究センター スタッフ一覧 (五十音順)

(2023年3月31日現在)

所長	森野彰人(美術学部教授)
副所長	砂原 悟(音楽学部教授)
同	武内恵美子(日本伝統音楽研究センター准教授)
専任研究員/教授	佐藤知久(芸術資源研究センター教授)
兼任教員	石原友明(美術学部教授)
同	岡田加津子(音楽学部教授)
同	川端美津子(音楽学部准教授)
同	砂山太一(美術学部准教授)
非常勤研究員	高嶋 慈
同	滝 奈々子
同	竹内直
同	埴 美智子
同	橋爪皓佐
同	藤岡 洋
客員研究員	あごうさとし
同	石谷治寛
同	井上 航
同	加須屋 誠
同	川崎義博
同	菊川亜騎
同	紀 芝蓮
同	中ハシクシゲ
同	林田 新
同	前崎信也
同	牧田久美
同	矢津吉隆
同	山下晃平(美術学部非常勤講師)
同	山田 毅

プロジェクト・リーダー	彬子女王殿下
同	あごうさとし
同	安藤由佳子(美術学部准教授)
同	石谷治寛
同	梅岡俊彦(音楽学部非常勤講師)
同	大西伸明(美術学部准教授)
同	岡田加津子
同	岡本 秀
同	加治屋健司
同	加須屋明子(美術学部教授)
同	金田勝一(美術学部教授)
同	菊川亜騎
同	熊野陽平(美術学部非常勤講師)
同	小島徳朗(美術学部教授)
同	佐藤知久
同	正垣雅子(美術学部准教授)
同	砂山太一
同	高嶋 慈
同	高瀬菜菜(美術学部非常勤講師)
同	高橋 悟(美術学部教授)
同	高林弘実(美術学部准教授)
同	竹内直
同	武内恵美子
同	田中栄子(美術学部教授)
同	谷内春子(美術学部講師)
同	玉澤春史(美術学部客員研究員)
同	中井友路(美術学部非常勤講師)
同	畑中英二(美術学部教授)
同	深谷訓子(美術学部准教授)
同	前崎信也
同	牧田久美
同	松尾芳樹(芸術資料館学芸員)
同	森野彰人
同	矢津吉隆
同	山田 毅
客員教授・特別招聘研究員	彬子女王殿下
同	森村泰昌
客員教授	建畠 哲
特別招聘研究員	加治屋健司
同	塩見允枝子
運営委員会委員	阿部裕之(アドバイザー・音楽学部長)
同	石橋義正(情報管理主事・美術学部教授)
同	小山田 徹(アドバイザー・美術学部長)
同	田島達也(附属図書館長・芸術資料館長・美術学部教授)
同	細川周平(日本伝統音楽研究センター所長)
同	松尾芳樹
事務局	阿部 慧
同	奥田良輔
同	鬼頭 謙
同	桐月沙樹